



第55号

〒105-0001 東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻戦没者
慰霊平和記念協会
電話 03(3432)1090
FAX 03(3432)5567

編集人 田中賢一
発行人 菅原道照

第二十四回

特攻戦没者合同慰霊祭

恒例のこの行事本年は四月四日に行はれた。参列者三二六人、折しも九段の桜は満開。桜花の如くパツと咲き、いさぎよく散っていった特攻隊員を偲ぶ。

大君の辺にこそ散らん桜花
今度咲く日は九段の社

島村 中一飛曹 第一神雷桜花隊 乗員養成所15期 20年3月21日沖繩近海戦死 20才

春まだき九段の花と咲き散りて
勝ちみ戦の基ひらかん

長谷川実大尉 第20振武隊 陸士55期 20年4月2日沖繩近海戦死 24才

桜花と散り九段に還るを夢に見つ

敵艦屠らん我は征くなり

浅川又之少尉 第43振武隊 候9期 20年4月6日沖繩近海戦死 23才

さくらさくら若桜今日は散りしも
明日は九段の花と咲く

大島 寛伍長 第74振武隊 仙養14期 20年4月7日沖繩近海戦死 19才

国のため生命捧げし若桜
弥生の空は九段坂上

服部武雄伍長 第105振武隊 少飛14期 20年5月25日沖繩近海戦死 19才

靖国の桜となりて薫る日の
誇りを胸に秘めて飛び立つ

若杉正喜伍長 第60振武隊 少飛14期 20年5月4日沖繩近海戦死 20才

目次

特攻隊合同慰霊祭	1
遊就館の特攻関係展示	2
特攻隊員の終戦について①	5
終戦時自決した空挺隊員	20
竹田恒徳著「私の肖像画」抜	20
靖国の花と咲かなむわれもまた いくさの庭に散りし友らと	
磯貝 厳中尉 第五神剣隊 予備学生13期 20年5月4日沖繩近海戦死 24才	
身はたとえ南の海に朽ちぬとも やがて九段の花と咲くらむ	
中内静雄二飛曹 第八神雷隊 乙特飛1期 20年5月11日沖繩近海戦死 18才	
大君の為にぞ散れと教ふらん 靖国社頭の若き桜は	
座間重信中尉 神翔攻撃隊 陸士56期 20年4月11日沖繩近海戦死 23才	
よしや身は千々に散るとも来る春に また咲き出でん靖国の宮	
関 三郎軍曹 義烈空挺隊 20年5月24日沖繩戦死	
禪語に接し特攻隊員の心情	21
文芸欄の新設	24
今期の戦史	25
為安井昭一 島津源吉と書かれた日章旗	28
14年度事業報告と収支計算書	28

以上桜と靖国神社が出ているものを拾ったが、まだ沢山ある。大和心の象徴である桜は、御祭神の心に強く刻まれているのだろう。



新装成った靖国神社遊就館の特攻関係展示品

増築改装された遊就館は、平成14年7月13日開館となった。「特別攻撃隊」に掲載してある該当事事も、この度全面改訂したが、ここに改めて紹介する。開館当日配布された冊子に遊就館の由来についての解説があるので、先ずそれを転載する。

遊就館は、明治維新当時から御祭神の遺品、各戦役、事変の記念品、その他古今の武器類を蒐めて、これを陳列し、御祭神の奉慰と遺徳を欽仰するため明治十五年、建設開館した。その後、日清・日露戦争、第一次世界大戦等を経て、度々の増改築、別棟新設など館の拡充が進められてきたが、大正二年の関東大震災で大破し、撤去の已むなきに至った。翌年取り敢えず仮館を建設、規模を縮小して開館した。以来、関係者によって再建の事が図られてきたが、昭和七年、再建。昭和九年竣工の付属国防館（現靖国会館）と共に本来の使命を果たしてきた。昭和二十年、大東亜戦争終結と同時に遊就館令が廃止され閉館となった。昭和三十六年から靖国会館の二階を改修して宝物遺品館とし、宝物遺品の陳列展示を実施していたが、昭和六十年十二月、

遊就館改修工事竣工、昭和六十一年七月、新装なった遊就館に展示品を移し、さらに展示内容等を充実し再開の運びとなった。平成十四年七月十三日、御創立百三十年記念事業の一環として本館の内装を新たにし、更に新館を増設。ガラス張りのホールの中に零戦を初め、屋外展示物を収納、展示することとなる。

館名の由来

中国、戦国時代の儒者荀況の著『荀子』勸学篇の「君子居必擇レ郷、游必就レ士」より「游」「就」の二字を選んで命名したもので、高潔な人物に就いて交わり学ぶの意である。



右の部分が新築



零 戦

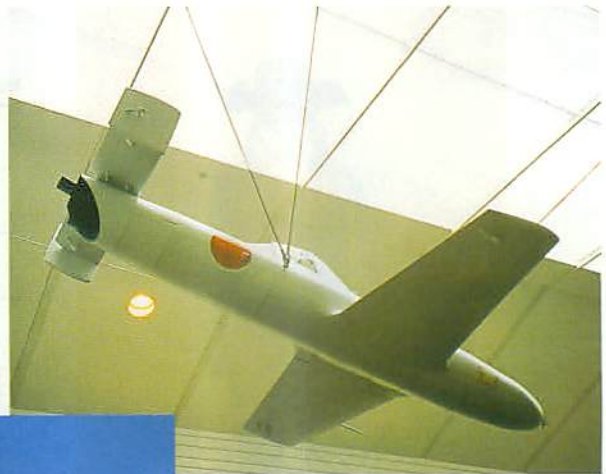


彗 星

特攻に使った機数

零戦	321
彗星	61

	総重量	兵 装		全長
		射撃	爆撃	
桜花 11型	2.14t		1.2t	6.066m
一式陸攻 24型	15.5t	20 [≒] γ×4 13 [≒] γ×1	2.14t (桜花)	19.97m



桜花



一式陸攻と桜花

全幅	全高	最大速度	乗員
5.00m	1.16m	876km	1
24.88m	4.9m	470km	7



回天



伏竜

回天一型要目・性能	
全 長	14.75m
胴 直 径	1.00m
全 重 量	8.3t
最高速度	30ノット
行動半径	10ノットで78,000m
	20ノットで43,000m
	30ノットで23,000m
機 関	93式酸素魚雷機関
燃 料	酸素と石油
軸 馬 力	550HP
炸 薬 量	1.55t



特攻隊員の像（屋内）



特攻隊員の像（屋外）

特攻のレリーフ



空挺特攻



航空特攻



水中特攻



水上特攻

特攻隊員の終戦について

平成13年12月11日、午前10時より、財団法人借行社3階会議室において表題の座談会が開催された。本記事は、その後半の記録である。

当日の出席者は左のとおり。

〈順不同〉

- 陸軍 佐々木 朗 (陸士57期)
 - 吉武登志夫 (陸士57期)
 - 深川 巖 (陸士57期)
 - 小川 武 (特操1期)
 - 森木 基裕 (陸士58期)
 - 敷下 郁男 (少飛14期)
 - 牧 外吉 (少飛15期)
 - 皆本 義博 (陸士57期)
 - 田中 賢一 (陸士52期)
 - 今泉 利男 (丙飛16期)
 - 河崎 春美 (甲飛13期)
 - 多賀谷虎雄 (甲飛13期)
 - 奥野 博司 (予学4期)
 - 荒井 志朗 (甲飛13期)
 - 海老澤善佐雄 (海軍14志)
 - オブザーバー 飯野 伴七 (海兵72期)
- ★平成14年9月3日逝去
 上田恵之助 (予学5期)
 菅原 道熙 (陸士61期)

菅原 では午後の冒頭は、深川さんから陸軍関係の自決、自爆について、どうぞ。

深川 自決をされた同期、陸士57期生について、その時の模様を述べます。これは冊子として皆さんにお配りしましたが、要約して簡単に話します。

雨宮文彦君は野砲第3聯隊でした。昭和20年8月15日、部下には「平静只待命」と大書し、「日本人として恥ずかしくない行動を取れ」と訓示しました。翌16日、感応寺で自決されました。感応寺は昭和20年2月頃から海岸砲台(三八式野砲)が構築されていた浜松の近郊にあります。雨宮中尉指揮の下、東海28部隊水野分駐隊は愛知県水野村観心寺に駐屯、本土決戦の訓練をしていました。16日、検閲に見えた部隊長を門まで見送り、彼は姿を消しました。

翌18日、奉天のお寺の子供さんから「隊長さんは裏山の方へ行ったよ」と告げられて隊は騒然となりました。その頃、彼は東にならかな傾斜をした裏山で、軍帽、軍服、軍靴を整然と岩の上に揃え、軍刀で頸動脈を切り、ハンカチで刃の血を拭い、刀を鞘に納め、左手で握り、顔を乗せ、東方に伏せた儘、絶命していました。軍帽の下の小さな紙片に「遥か東方を拝し、我今自決す」と絶筆が

残されていたということがあります。鈴木勇三君は歩兵第4聯隊でした。8月20日、ビルマ・モールメン南方9哩にて、軍旗奉焼後、自決しました。「聯隊旗手として軍旗と共にある」というのが彼の信念であったろうと思います。軍旗を奉焼した彼としては潔く自決の道を選んだのだと思います。

終戦時自決者一覽 (話題登場順)

状況としては終戦に際し、勅命を関東軍司令官に伝えるため、8月17日、竹田宮殿下が新京に飛来されました。翌18日、奉天の第三方面軍司令部に立ち寄られて京城に南下、19日帰国の途に就かれました。この新京、京城間の竹田宮ご搭乗機護衛を第26教育飛行隊が命ぜられ、編隊長

天宮 文彦	陸士57	野砲3	中尉	20年8月15日
鈴木 勇三	陸士57	歩兵144	中尉	20年8月20日
福田 滋	航士57	26教飛	中尉	20年8月20日
西谷 真六	航士57	26教飛	中尉	20年8月20日
後藤 幸久	航士57	26教飛	中尉	20年8月20日
鎌田 正邦	航士55	26教飛	大尉	20年8月20日
杉原 滋男	航士57	55戦隊	中尉	20年8月16日
西川 俊彦	航士57	168振武隊	中尉	20年8月18日
戸田 徳二	軍校2	2工兵隊	中尉	20年8月15日
野上 正一	軍校2	1工射砲	中尉	20年8月15日
野田 弘	軍校2	区隊長	中尉	20年8月15日
加守三千雄	少飛14	117振武隊	伍長	20年8月16日
新木 棟	少飛14	16戦隊	伍長	20年8月17日
橋口 宏	海兵72	平生突撃隊	大尉	20年8月18日
松尾 秀輔	海兵74	大賀突撃隊	少尉	20年8月25日
神田 正輝	幹候9	30戦隊	少尉	20年8月25日

して、場外の芝地を選んだのでした。

次に杉原滋男君。彼は非常に純粋な男でした。飛行第55戦隊に属し、三式戦で小牧を基地として空戦に従事し、8月16日、大阪市住吉区南港で自爆を遂げられました。

次いで西川俊彦君。彼は第168振武隊長として終戦を八日市飛行場で迎えました。彼は8月18日朝離陸し、特攻戦死した戦友の後を追って、故郷の浅間山々頂で自爆しました。彼は遺書で

「私は皇国の再起を信じつつ、我が浅間山頂に鎮まることに決しました。私は朝夕、この山頂より皇国の、そして故郷の勃興を静かに見守っております。立ち上る噴煙を見るごとに思い起して下さい」と記しております。

同じ57期相当、満州国軍官学校2期の戸田徳二君、野上正一君、野田弘君。この3名が白決。戸田君は8月15日、新京において、野上君は奉天東方の渾河河畔竜王廟にて。詔書を拝し、「わが事了れり」となし、直ちに身辺を整理し、隊長以下にそれとなく別辞を述べ、正装して陣地内に端座、遙かに東方を拝して拳銃により見事な自決を遂げました。また野田君は軍官学校同期のトップで卒業、当時は軍官学校の区隊長でした。8月15日、新京の護国神社、社殿脇の繁みの前で自決致し

ました。

菅原 只今の深川さんのお話しについて、ご質問はありませんか。

藪下 我々の期でも20年8月16日、第16振武隊の加守三千雄が調布飛行場で、やはり自爆しております。8月17日には平塚の第16戦隊で新木棟が自爆しております。

菅原 二人とも同期ですか？

藪下 はい、同じ熊校の出身です。菅原 あと何かありませんか。

森木 今、お話しがあった奉天飛行場に4名の方が終戦を告げに来られました時、私は同飛行場にいました。終戦を知って、58期が中心となって馬賊になろうじゃないか、などと考えて、当時、食糧、弾薬等物資を集めておりましたところ、島田中佐から「陛下の命令で戦さは終わったのだ。この周辺には59期が500名程おるから、彼等を連れて祖国へ帰れ」と言われ、8月19日の午前9時30分頃、この約500名を連れて帰国することができました。8月19日

奉天を出て、20日には朝鮮に入りました。自爆された鎌田大尉には時々お眼にかかっていました。鎌田編隊の自爆を目撃したソ連兵達は「日本の将兵を大事にしないと何をされるか分らんぞ」と思ったそうです。以上、付け加えます。

菅原 では海軍関係に移りたいと思います。飯野さんどうぞ。

飯野 始めに橋口 宏大尉について話します。この方は回天搭乗員の代表的存在です。ピストルによる自決(頭部貫通)でした。20年8月18日、広島県平尾の回天基地においてです。そこで教官をされていました。

経歴は昭和15年12月1日、海軍兵学校入校、18年9月15日同校卒業、卒業と同時に、巡洋艦「伊豆」に乗り込み19年8月、平尾基地に転属になりました。出撃について血書にて嘆願したと聞いております。しかし後進指導のため残されたのでした。同期の友が出撃して往く、彼は切歯扼腕の思いで、出撃命令を待っていた処、やっど8月20日頃、6隻の回天特攻隊長として出撃の内示があったそうです。しかし終戦という事態になり、多くの特攻隊員に死に遅れ、また国体護持の大任を果し得なかったことから、8月18日午前3時頃、自分が乗るべき回天の前で、

第2種軍装に身を正して拳銃により自決を果したのあります。血染の軍服は遺品と共に遺族に渡されました。それを出身中学の同窓生が見て、遺族の前で絶句してしまつたと聞いております。なお橋口中尉が自決する前日、伊58号潜水艦が前線から帰投して、残つ

た回天を揚陸したあと、同期生達と、かなり遅くまで飲んだそうですが、酔つた上での自決と思われたくないためか、

「俺は午前3時まで待つ」と自啓録に書き込んだ上で自決しているのです。それからもう一人。

74期の松尾少尉が大分県大賀基地で自決しています。彼の場合は手榴弾でした。場所は同基地の練兵場であつた

と聞いています。

菅原 それでは他に

小川 私は前にお話ししたとおり、第30戦隊にいた者ですが、第30戦隊では、幹候9期の方が山の中に入って山岳戦をやっていたようです。8月15日、戦隊、飛行場大隊を含め、全員が集められ、一個部隊500名位に分けられました。

この中で幹候9期出身の神田正輝少尉がピストル自決されました。作法どおりでした。遺体はそのまま引き取れないので、小指を切り取って茶毘に付しました。同じ幹候9期の宮本少尉が神田少尉の自決場所を確認に行っております。

菅原 それでは自決、あるいは自爆された方の紹介は終りにして、これから15時頃まで、終戦時の心境をお話し頂くことにします。

今度は海軍さんからお願いします。今泉 では私から、私は前述のとおり

丙飛16期で終戦の時は台湾におりました。丁度、素敵に行っておりましたので、終戦の詔勅は聞かず、午後3時頃、宜蘭に帰って、終戦を知りました。皆集まって「このまゝでは帰れない。

明日、皆爆弾を抱いて沖繩へ突っ込む」ということになり、夜、整備員に頼んで50kg爆弾を積んで貰ったので。その晩は宿舎に帰り、翌朝4時に集合と決まりました。翌朝3時に起き、バスで飛行場に着いたら、やけに静かで、搭乗機の傍らに行ってみたら、プロペラも爆弾も外されていて、皆哑然としていました。そこへ玉井中佐が来られて「貴様達はまだ若いものだから、無駄死するな。これから内地に帰って夫々勉強し、日本を建て直さなければならぬのだ。絶対勝手な死に方など、やらせん」とお説教されました。

その後、中国軍に零戦の操縦方法を申し送るため、約1ヶ月残され、その年の12月末、内地へ帰って来ました。復員して、することがない。2年間外務省に手伝いに行き、パイロットのテストを受けようと思ったのですが、マッカーサーの公職追放令にひっかかるというのであきらめました。

まごまごしていたら警視庁から連絡が入り、「あなたは海軍軍人として上級におられたのだから、無試験で、警

察に就職できます」と言われました。具体的には池袋警察署の警護係長から懇請され、お世話になることに致しました。交通係長を勤め、定年を迎えましたが、丁度その頃、宮古島の陸軍守備隊長だった人から電話が入りました。終戦後53年目くらいになりますが、電話によれば「戦時中、あなたの部下であつた三浦さんという方が、宮古島付近でグラマンと交戦中、撃墜され、島の珊瑚礁に遺体が流れ着いたそうです。海軍の飛行服で胸に三浦光男とありました。遺体は村の村長さん宅の庭に埋葬されたそうです。その当時の編隊長は柏谷と云われ、飯野さんとご同期だそうですね。この方も空中戦でやられたと聞いておりました。

元守備隊長さんの電話で、思い出しました。北海道で小学校教師をしておられる三浦さんの弟さんに連絡をとって、奥さんと一緒に宮古島へ行つたわけです。元守備隊長さんと一緒に骨を探しました。50年以上も経っていたので、何も見つかりませんでした。いろいろ手段を尽したのですが、遂に分らずじまい。その弟さんは宮古島の珊瑚礁を持ち帰り慰霊祭をしたそうです。

私もその珊瑚を自宅に祭り、当時を偲んでおります。以上です。

菅原 よろしければ次に河崎さん。

河崎 先程、申し上げましたが、8月に入ると朝から晩まで空襲があり、敵はいつも上空を旋回しておりました。8月11日、爆弾で回天搭乗員が負傷しました。12日夕刻、「明朝〇六〇〇以降、即時待機」という命令を受けました。壮行会をやるとういうことで、一杯飲んで寝ましたが、我々は当時、一般農家に分宿しており、翌朝5時頃に起きたら、もう家の人は居ない。農家も空襲の影響で朝早く仕事に出ていたのです。それで家の人達に挨拶することもできず、墜道に行き待機してました。その日、結局敵は近付いて来なかったの、待避解除になりました。

15日の玉音放送は聞きましたが、何のことか、さっぱり分らない。本隊では短波放送を聞いていたようで士官は皆知っていました。司令からの「総員整列せい」との命令で集まりました。司令が「どういう状態になるか分らんが、軽率な行動は絶対するな」と訓示をされたのですが、自分はどうしているのか訳が分らず、拳銃を持ち出してあちこち、ぶっばなすことで、何とか気が収まったような状態でした。ところで16日夕刻、また出撃だと言われたので「よし、今度こそは」と張り切ったのですが、情報誤りと分って出撃も沙汰やみになりました。このままでは皆、

気持が鎮まらないので、炸薬1.6屯の頭部を付けた回天を走らそうということになり、艇を墜道から引き出しました。さて誰が搭乗するかという段になり、結局、助腺炎で体力が一番弱っている奴がいいだろうということで、触発信管と電気信管を8番線針金で本体に縛り付け、そうして、そいつを乗せました。彼はうまく操縦して帰って来ました。そうしたら、もう一人の男が来て「俺も乗せろ」と騒ぎ出したので、いつも乗って予定航路を走り無事帰投しました。このような状況だったので、とにかく搭乗員は早急に復員させよということになり、24日あたりから復員が始まりました。

私は最後まで残りましたが、9月6日、対外的には隊は閉鎖することになり、名前も呉海軍保安隊須崎派遣隊と改称されました。10月の中頃、米軍が来て武器弾薬を引き渡しました。大きな弾薬類は別として、小火器弾薬類については出鱈目でした。出撃命令が出て弾薬庫からこれ等を皆搬出して配置したまゝであつたため、まともに返却されませんでした。だから有るものだけのリストを作つたため、しばらく経ってから確認した処、過不足が出ました。それでも何とか員数合せをして、引き渡しました。さていよいよ艇を沈め

るといふ段階になり、自分自身を失うような気がして立ち会うことが出来ませんでした。そうこうしながら、昭和21年1月に復員しました。以上です。

菅原 では次、多賀谷さんどうぞ。

多賀谷 今お話になられた河崎さんは回天会の事務局長で「回天の神様」と言われております。私も同じ回天搭乗員ですが、私の歩んだ経験は狭く、語るべきことは多くありません。

午前中に申し上げたことに若干、付け加えたいと思います。終戦時の心境とは逸脱するかもしれませんが、回天本来の目的は、この艇を操縦して敵艦に突撃するということです。1.6屯の炸薬量ならば航空母艦のような巨艦でも当れば完全に轟沈です。それだけの威力ある実装訓練を第23突で終戦後、ただ一度、行ったということ。私達のように事態を知っている者にとっては大変なことなのです。回天で出撃するには搭乗訓練を25〜26回程しなければなりません。一回、一回が死につながる訓練ですから事故については枚挙にいとまがありません。まず第1回の搭乗訓練で、回天発案者の黒木大尉が亡くなっています。その状況については皆様も存知だと思いますが、遺書とも言うべきメモを残されています。

かの有名な佐久間艇長に匹敵するであ

ろうと言われる方でした。

回天という名称は黒木大尉の遺書から取ったものです。

次第に出撃のチャンスを失い、且つ上層部の作戦変更により搭乗員達は、本土防衛のため基地回天隊と称され、各地に配備されるようになりました。

その第一陣が沖繩へ向けて発進した白龍隊でした。この白龍隊は回天搭乗員、基地隊員、整備員で編成されていたが、輸送艦に同乗し、沖繩本島に近い、慶良間諸島付近で、敵潜水艦の攻撃を受け撃沈されました。この地点は回天会の調査により特定されたようです。しかし戦死者の死亡年月日はまちまちです。確認不能というのが実状のようです。

小灘隊長を長とする出撃第2陣が八丈島へ出撃しています。また第3陣、第4陣は河崎さん達が出撃しました四国です。一方第33突撃隊は宮崎県油津に本拠を置いておりましたが、この部隊は皆さんご存知「同期の桜」を作詞した帖佐大尉です。小灘さんにしては帖佐さんにして、もっと早い時機に出撃する予定でしたが、隊の運営に不可欠な存在とし搭乗員の養成に力を尽されたわけです。しかし戦局の急迫に連れて、小灘さんは八丈島へ、また帖佐さんは油津に赴任されました。

私は大津島訓練から九州の栄松へ赴任しました。当時は空襲にいつも脅やかされ、到着が大幅に遅れたことを覚えていますが、しかし6月末までには全員が揃い、8月終戦まで、そこにいたわけです。B29の爆撃や、グラマンの攻撃は毎日のようにありましたが、8月15日にはビタリと来なくなり、嘘のような静けさを感じました。

正午に終戦の詔勅を聞いた時、誰もが信じられなかったと思います。みな肩を抱き合って泣きました。中には残っている艇で出撃しようと言う者、相手が居ないのに出撃しても仕方がないと言う者、いろいろでした。我々の仲間には自決しようという志を持った者はいなかったように思います。8月25日、26日頃、復員命令を受け、九州の地を後にしたことが記憶に残っております。

奥野 三日前に「震洋会」の集りがありまして、この座談会のことを話しました。この「震洋」について知らない人も居られるだろうから、大いにPRして来いと言われました。その辺の処をお話して宜しいですか。

菅原 結構です。

奥野 では、「震洋」には一人乗りと二人乗りとありまして、全部ベニヤ板でつくられています。これは壊れ易い

ようにベニヤにしてあるのです。壊れると爆発する一種のモーターボートで、一人乗り用は全長5m、二人乗りは全長6mです。艇の先に20kg爆薬を装填して敵艦船に突入し、衝突によって爆発する設計になっています。

最初は一人乗りだけだったので、一人乗りだと操縦に専念中は本隊との連絡が取れないため、二人乗りが出来たのです。一人乗り2、二人乗り1の割合で部隊が編成されました。だから一人乗りが50杯だと二人乗りは24杯で計74杯が一つの部隊でした。作戦的には一部隊で輸送船一隻を沈めれば良いということ。つまり一部隊のうち、一杯か二杯が当たる確率を考えていたようです。こちらが50人戦死しても敵一隻で50人か100人を犠牲にする。そういうことで輸送船を標的にするのが我々の使命だったので。隊では殆ど夜間訓練でした。燃料の関係から一週間に1回くらいしか訓練は出来ませんでした。私の部隊は佐世保から鹿児島まで実装艇（炸薬を積み、信管も装着した艇）を二度、夜間回航しました。

制空権を敵に取られて、海岸線近くを、真夜中しか走れません。最終到着地点は大隅半島突端の佐多岬です。

戦後、観光で薩摩半島の坊津港から開聞岳を廻って佐多岬を眺めた時、よ

くも震洋艇で回航したものの……と思う程、危険極まりない処でした。

その回航のとき「ちょっとおかしな船が見えるが彼奴にぶつけるか」と搭乗員が言った処、たまたまその艇に朝日新聞の報道班員が乗っていました。彼が「私はぶつかるのを報道する立場だから降ろしてくれ」等、ゴタゴタ言っている間にその不審な船は居なくなりました。後でそれは潜水艦だったのではないかと思いましたが、そのように、危険な海域を実装艇で2度も回航したのです。終戦の時には命令で信管を全部はずし、爆薬は載せたまま、沖合いの深い処に沈めました。その指揮は私を取り、24杯の艇を全て沈めました。私はこの内一杯でもいから岩にぶつけて爆薬の威力を確かめれば良かった。今でも後悔していますが、あの当時は出来ませんでした。

それと同じように、島原にいた部隊は信管を外さずに沈めたのです。沈めた艇が戦後、魚網にひっかかって上った時、杜撰な沈め方をしたということ。で新聞沙汰になったことがありました。予科練時代、同じ教育を受けた同期の搭乗員に聞いたら、そんな事はあり得ないと言ったことを確認しておりません。佐多岬は交通の便が悪く、対岸の指宿まで、通称ダイハツと言う上陸用

舟艇で部隊移動し、その小学校で部隊解散をしました。私は残務整理のため下士官・兵4名と一緒に、遅れてその小学校へ行った時には全員が復員した後でした。教室の黒板に私宛の寄せ書きが一杯に書かれていたことを未だに覚えています。以上です。

吉武 その震洋はいつ頃開発されたのですか。

奥野 昭和19年3月頃です。実戦としてはコレヒドール、リンガエン湾で戦果を挙げています。

吉武 19年の秋、私が銚子飛行場に居た時、利根川をモーターボートのような艇が勢よく走っているのを見ました。あれがその艇かな。

奥野 そつだと思えます。

速力は25ノットでないと使いものになりませんでした。30ノットまで出ました。震洋隊は約110ヶ部隊ありました。その搭乗員は一部隊に50名でした。震洋隊の特攻隊員は非常に多かったわけですね。

菅原 では荒井さん。

荒井 今のご質問の中で、利根川の話ですが、銚子には2部隊いました。少し上流の笹川に1部隊がいて、その連中の訓練だったと思います。私が居ました台湾の海口基地には山本部隊と、浦本部隊の2部隊が布陣していて、私は山本部隊におりました。この2部隊は秘密の部隊で、外との連絡は全く閉ざしてましたから我々兵には何も知らされなかった。従って8月15日の終戦も知らない。それで約一週間後の8月20日過ぎに高雄から海軍参謀が魚雷艇でやって来て「戦争は負けた」ということを部隊長に通告しました。翌日散戦の事実を知らされました。米軍はフィリピンを制圧してから沖縄に攻め込んできて来たわけですが、米軍艦艇は台湾沖を通過して来た。我軍としては台湾に米軍が上陸するものと考え、我々に出撃準備命令が出されたのですが、空振りになり、8月15日を迎えたわけです。兎に角、日本の敗戦が信じられませんでした。出撃するかあるいは自決をしてみました。搭乗員達は部隊長に迫りました。

連合艦隊司令長官から白鞘の短刀を頂いている。これは若し戦いに敗れた時、あるいは出撃が不可能になった場合、自決せよということではないか等と議論しましたが、結局、部隊長の命令で軽率妄動するな、自決する時には全員で……となり、そのままの状態、日を過ぎていたわけですね。

台湾の場合は中国軍が占領軍として入って来ました。中国には海軍はゼロです。従って我々には占領されたという意識は全くなかった。むしろ中国海軍を指導するという状況が続きました。

その後、台湾南部にいた我軍の将兵は全員、高雄の軍港に終結させられて武装解除を受けました。我々は殆ど丸腰でしたが白鞘の短刀が唯一の武器と言えは武器でした。これさえも取り上げられることになりましたので、我々は皆、海中に沈めてその日をやり過したわけですね。それで復員になるのです。今度、船が無い。何時帰れるのか分らない。二、三年は帰れないかもしれないということ、自活することになりました。台中に集り、現地を開墾して、野菜や米作りをやりました。

そのうちに、米軍が上陸用舟艇のLSTを貸与してくれ、台湾に残留していた日本軍将兵、それに台湾在住の同胞を輸送することになって、昭和21年2月、高雄港から広島の大竹港に帰って来ました。自宅には3月末、帰りました。

海軍の艦艇には戦艦、巡洋艦、航空母艦等の艦と、魚雷艇、掃海艇等の艇があります。しかし震洋は艇と称しているけれど正式な艇ではない。震洋そのものが一兵器なのです。乗っている搭乗員はこの兵器の一部品として、突撃するわけです。突っ込んだ場合、10隻のうち一隻成功すればいいと上層部

は考えていたようです。

菅原 それでは次、海老澤さん。

海老澤 我々は最後の特攻でしたが、何も出来ずに8月15日を迎えました。

当日の放送は雑音がひどくて全然内容が分らずじまいでした。三日程、特攻訓練を受けました。その間、よその航空隊から機が飛んで来て「奮起せよ」とか、いろいろ情報が入って来ました。そのうちに「特攻隊は早く解散し帰郷せよ」という指示がありまして、我々は8月23日、夫々自宅に帰ることが出来ました。終戦まで私は約200名の特攻隊員を掌握していました。何かお国の役に立ちたいと思い、全員を集めて「天皇陛下に事があつたら我々伏龍隊だけでも奮起してお護りしようではないか」と話し、一人一人帰郷先を書いて貰い、何かあった場合には私の勤務先を集って呉れと申し伝え、全員を帰しました。私ども伏龍隊員は毛布3枚しか持っていません。あとは着たきり蕉、これでは古参兵と差が付き過ぎるので、8月21日、22日、東京の授産所へ行って「残っているもの何でもいいから我々に渡して下さい」と言ってトラック4〜5台分買って来て、少しづつ隊員に分けて帰郷させました。

今でもその時の住所録を保管しております。その後、日本も民主主義の世

になり、落着いて今日に至りましたが、此の間、何も起らず、アメリカという国の在り方、民主的な国家の行き方に感じ入った次第です。以上。

菅原 それでは陸軍の方に移ります。先ず皆本さんがお急ぎのご用があるようなので、皆本さんからどうぞ。

皆本 先程、触れましたが、海上艇進隊で、沖縄本島西方海上にあります慶良間列島の渡嘉敷島に居りました。

戦後、陸上自衛隊幹部学校の戦史教官で、沖縄方面陸軍作戦を担当しました関係上、若干調べましたが、沖縄戦の特色は第二次大戦最後の戦いでありました。米軍の資料にもその旨、記されています。ニミッツ元帥麾下、米軍艦隊、これは空母18隻を含む、例を見ない大艦隊でありました。更に英国のローリング中将指揮する英国艦隊が、東洋に回送され、沖縄周辺洋上に作戦参加したのであります。これらの艦は明らかに米艦とは違っていました。陸軍はバックナー中将指揮する第10軍でしたが、この軍はガダルカナル島の戦いで勢いをつけ、沖縄戦に参加したわけですが、沖縄戦終了の頃は、言語に絶する惨憺たる状況にあったと聞いております。我々が居りました渡嘉敷島

も、全島が燃え尽き、依るべき村落と

て全くない。村民もサイパン島玉砕の影響か、388名の老若男女が一緒に自決して果てたという状況でありました。終戦の時、手元に残った電池を騙し騙し使い、短波放送を聞いて戦争は終わったよと考えると、8月18日、思い切った軍使を立て、米軍に向かわせた処、戦いが終わったことを確認したわけですが、天皇陛下が素晴らしい詔勅をお出しになり、齊々として矛を収めるよう、隊A・N・カンノー中佐が教えてくれました。軍使はお土産まで貰って帰って来ました。また米軍から「傷病者が居たら当方で預かる」との提言がありましたので、早速、蜂窩織炎で困っていた部下を米軍に托しました。

その時、私が感じたのは特攻作戦をやってまで遂行した戦いが終って、次にやることは日本の復興だということ

です。私は熊本の済済(済済)という旧制中学で学びましたが、創立者の佐々友房先生は明治10年、西南の役における西郷軍の一武将で吉次峠の守備隊長をしておられたのですが、有名な谷村ケイスケ軍曹が司令官の命を受けて乃木聯隊の支援連絡に行く時、佐々先生は「武士の情」と、道を通してやったそうです。佐々先生は戦いが終わった後、「熊本の復興は教育からやらねばなら

ない」ということで同心学舎という私学を建てられました。それが天聴に達し、明治15年、明治天皇から御門の御内帑金を頂いたそうです。その事を思い出しました。我々は生きて祖国に帰り、祖国の復興に力を注がねばならぬ。日本本土も被害は沖縄と変わらないだろうと皆で話し合いました。

我が中隊も1/3以上が戦死しましたが、戦友の遺骨を砕き、ガーゼに包み軍服の裏に縫い込んでおきました。生きていたら祖国に持ち帰ろうということでした。沖縄戦が始まる前、海岸を巡視していた処、両足切断の遺体が漂着しているのを見つけました。着用していたカボック裏に「舞水34」と記されていました。水兵でした。復員後、カボックとご遺骨を第二復員局に届けたら、金沢出身であることが判明しました。

そのような一幕もありましたが、生きて帰った我々は歯を食い縛ってでも日本の復興をやるべきだという覚悟でした。浦賀に上陸して、それから、みすほらしい列車に乗って故郷に向いましたが、岡山に着いた時は、青木上等兵が「隊長は熊本に帰ると言われたが、帰っても食い物は何も無いだろう。俺は漁師だから故郷の四国へ一緒に行かないか。しばらく面倒を見る。その後、

熊本へ帰って復興に精出されたらどうか」と言ってくれたのですが、私は「待て待て、俺は一度、熊本へ帰って両親の墓を確かめてから、出直して行く」と言って別れました。その後、私は戦死した部下全員のご遺族の所を整理して廻りました。今でも記憶に強く残っております。こんなところです。

菅原 それでは吉武さんどうぞ。
吉武 午前中お話ししたように、「石腸の総員18名の編成でした。編成後、ルソン島へ進出しました。そこで搭乗機を大半やらせてしまい、隊用の機を集めるの大仕事だったのです。

まず先発隊として1機がネグロス島に昭和19年11月に進出しました。ところが搭乗機が不調で、3回出撃しただけでした。その中で私達は12月になって出撃したのですが、そこでグラマンにやられました、セブ島のマツタン島に不時着、負傷しました。治療を受けている中にミンドロ島に上陸しましたが、結局、迎撃作戦は不可能になったわけです。20年1月、救出機によってルソン島に帰りましたところ、隊に残っていた者全員が転出した後でした。1月10日頃、「今、当地に展開している部隊はカガヤン平野に転戦せよ」との指示でバレテ峠を越えてカガヤンに入

り、2月、更に救出機でスゲガロウ経由で台湾に帰り着きました。

私は軍偵でしたから、師團司令部飛行班の要人をあちこち運ぶ仕事をしておりました。終戦になって我々は内地に帰らず、台湾に籠城して交戦するつもりでおりましたが、21年2月、全員内地に引き揚げとなり、鹿児島島に上陸しました。復員後はバージに掛って、

する仕事もない。炭鉱に行き、山仕事で日を過していました。昭和26年に、バージが解け、国民金融公庫に就職しましたが、昭和33年、飛行機に乗る機会、つまり航空自衛隊から話があり

自衛隊に入り、昭和45年まで勤務しました。同年退官しましたが、飛行機のことかどうしても忘れられず、大洋航空(現新中央航空)に入り、そこで約22年間、飛行機に関する仕事を続けて、平成2年か3年、72才まで航空関係の仕事に従事していました。

退職して暇ができましたので、戦争当時の記録を残して置きたいと思い立ち、「長い日々」と題した本を書き上げました。内容は昭和19年の春から、終戦までの約一年半の出来事を書きましたが、一生の中で一番印象に残った一年半を述べてあります。以上です。深川 先程、第198振隊の編成について説明致しましたが、それに若干補足

しながら隊員のこと、戦後の出来事などを話し致します。

昭和19年5月3日の夕刻、「飛行場長が深川を呼んでいるぞ」と言われて飛行場長の部屋へ行きました。夕方でも北側の薄暗い部屋でした。なぜかその時のことをよく覚えております。

そこで「貴官は明日、明野へ行くように」と言われました。勢いよく「はい」と申し上げたところ、続いて「明日は本校で特攻の編成がある。貴官は特攻だ」と一語一語の言葉でした。私は稍々間を置いて「はい、分りました」とお答えして部屋を出ました。部屋を出て直ぐ思ったことは「若杉も攻だったな」ということでした。若杉は幼年学校、予科士官学校、航空士官学校を総て恩賜で卒業した素晴らしい男でした。殉義隊の隊長として、昭和19年12月21日、レイテ湾に突入した級友です。私は翌5月4日、明野本校へ

行き、特攻隊・第198振隊を編成し、隊長となりました。直ちに伊勢北飛行場に展開しました。同飛行場は本校に近い所にあります。その飛行場には、

第195振隊 隊長藤山、第196振隊 隊長野上、第197振隊 隊長私深川、第198振隊 隊長藤井、第199振隊 隊長村山、第200振隊 隊長江藤、皆57期の少尉でした。一個隊は四式戦6

機です。196隊と198隊、第197隊と第198隊はそれぞれベアになってよく一緒に訓練しました。私の隊員は幹候7期の阿部少尉、同じく幹候8期の牧野少尉、それから少飛14期の飯田、飯東、牧内の伍長3名でした。その内、牧内伍長は6月1日、殉職しました。彼は大阪出身で、母上が見え、遺骨を抱いて帰られたことをよく覚えております。その頃の生活は寝室、食事、外出、訓練、

総て6名一緒でした。このことによつて隊長を中心とした團結そして連帯感が強くなりました。「いつでも行ける」という自信が身についた精鋭6機になりました。

終戦の日は大変暑い日でした。玉音放送ですから、頭を垂れて拝聴しておりますと、私の陰が地面に黒く映っていたことだけを非常に、はっきりと覚えております。内容については、はっきり聞きとれませんが、何か、とにかく重要なことらしいと思っております。暫くして隊員の一人が飛行場大隊から聞いて来たとの前置きで、「隊長！日本は負けたそうですよ」と報告してくれました。「そんなことあるか」。

「いや負けたそうです。間違いないそうです」。そんなやりとりがありました。その後のことですが、我々は集められて、戦争に負けたという正式な伝

達を受けなかったような気がします。これは記憶違いかもしれませんが、いずれにしろ戦さに負けたのです。終戦と言いますが、要するに敗戦です。我々6名は軍人として誠に申し訳ないという気持ちで一杯でした。

それから間もなく、明野では、将校だけ二日間、集団で隔離されました。それが何處であったか記憶にありません。飛行場に戻ってみたらプロペラを外された飛行機が整然と並んでいました。我々が隔離されている間に、処理されてしまったのです。

では本題の「特攻隊員の終戦時の心境」について申し上げます。私事になりますが、戦後、振武師隊の私共は一度も会合を持っておりません。特攻隊員になった時、それと終戦の時の心境を本日の座談会に備えるため、昨日、聞きとりました。少飛出身の人は亡くなり、福井在住の幹候8期牧野さんに電話しました。奥様が出られて「主人は出掛けております。夜、帰宅しますので、こちらから電話させます」とのお返事でした。折り返し電話が7時10分頃掛かって来ました。そこで当時の心境について尋ねたところ、牧野さんは「国のために命を捧げるのは当時、当たり前な気持ちだったので、特攻になろうとなるまいと同じだった」と言われ

ました。また「当時戦友達が、次々に特攻になったが、特攻の命令が何時来るかについての不安はなかった。何時ものように操縦訓練をしていた」という答でした。そこで終戦時の心境は如何と尋ねましたら「二重橋の前へ行って割腹自殺せねばならないという気持ちだった。申し訳ない気持ちで一杯だった。当時、拳銃だけ持って近くの鈴鹿山に入ろうとか色々話し合ったことを思い出す。生きているのが恥しいという気持ちで一杯であった」との答でした。

誠に純粋な、そしてすっきりとした返事でした。少飛の三人は戦後、亡くなりましたので、年令の多い三人が生き残っておりましたが、阿部少尉は一年(12月10日)永眠されました。

今思っても少飛の人達は本当に純粋でした。最近のことですが、少飛の人が「深川さん、あなたが北伊勢にいた時の桃太郎の飛行機を少飛会のカレンダーに是非載せたい」と申し出がありましたので平成13年11月分として、私の隊を海法画伯に書いて貰いました。今は事務局にも予備がなく、全部売り切れだそうです。私はこれらの人達と一緒に隊を編成したことを今でも誇りに思っております。以上です。 菅原 深川隊長！ちょっとお伺いしますが少飛14期には甲と乙がありました。

甲は予科を経ておりますが、乙はいきなり上級校に入った人達です。殉職された人は恐らく立航(立川航空隊)出身ではないかと思うのですが、如何でしょうか。振武195隊、196隊には我々の同期が行っておりました。明野へ行って、終戦時は熊本と聞いてますが。 深川 195隊、196隊は7月、淡路の由良飛行場へ明野北伊勢から発進しました。殉職された牧野伍長は編成表を見ますと、少飛14期と書いてあります。 菅原 わかりました。

菅原 それでは小川さんどうぞ。小川 特攻隊員となって、死という問題には触れませんでした。誰も死が恐ろしいとは考えておりませんでした。

戦争が終るまで恐怖感はなかった。若い少年飛行兵も、特操も、幹候も特攻で出撃して行きました。私は乗る飛行機が無くて行けなかったけれども気持は同じでした。特操の武本少尉が言いました。「お前は艦船攻撃や、空中戦をやったじゃないか。特攻に勝るとも劣らない仕事だ。だから特攻は後廻しだ。しかし補充機が来たら一緒に行くような」と言われた時は「はいッ」としか返事ができませんでした。それだけ17才の少年飛行兵を思うと涙が出ます。神々しいと言うか、いとおしいと言うか、国の為に死んで行ったので

す。我々特操は大学出の22、23才です。「あとから行くからな」と言った気持は当事者でないとは分らないし、本に書けるものではない。本当に純粋です。天皇陛下のため、父母のため、国のために皆、行ったのです。

特攻隊は兵器を超えている。そしてこれは日本人のみの戦術だと思いが、しかし特攻隊の中には朝鮮出身者も居ました。この人達には尊敬し、感謝致します。「俺は行って来るぞ、あとから来いよな」と言い残してピクニックにでも行くような雰囲気を出撃して行った人達を思うと、生き残った者として何かをやらねばという気持ちになります。

最近出た本に「特攻は媾和を結ぶ時、有利に事が運ばれるよう死ぬのだ」というようなことが述べられていますが、これについては疑問があります。特攻隊員として散華された人達については永遠に語り継いで貰いたい。日本人の精神とはこういうものなのだとお話を語り継いで貰いたいと願っております。 菅原 では森木さんどうぞ。 森木 今、大変面白いお話を伺い、胸が詰まって参りました。私は仕事で世界中を飛び回っておりますが、アメリカのニューヨークは何度か行きました。

丁度2ヶ月前の9月11日に、オサマビンラディンが、恐らく指示、命令したであろうと思いますが、あの破壊されたビルや、エンバイヤステートビルにも登ってみました。オサマビンラディンは昨日、今日のテレビで「あれほどの成果があるとは思わなかった」などと言ったようですが、80人以上の人が亡くなった大変悲しい事件が起りました。

でも、突っ込んだ人間の気持を忖度すると、私自身が終戦の前に特攻隊の命令を受けた時、「よし、にっこり笑って8月17日の朝にはソ連の戦車群に突っ込んでやれ」と思った心境と同じであつたらうなど私は思いました。しかし同時に多くの人々が亡くなっておられることについては深く哀悼の意を表します。

すのではないかと思ったりしています。次に東南アジア各国を回った時のことですが、マレーシアの国の方々から「森木さん、貴方は第二次世界大戦に参加されたと聞いております。私たちは日本が敗れたことも知っております。しかし日本が戦ってくれたお陰で我々民族は皆独立できました。我々民族は皆、日本に感謝しております」と言われました。複雑な心境と感謝の思いで彼等の言葉を聞いたことをお伝えしておきます。それから満州です。今は中国東北部と言いますが、昔の奉天、今の瀋陽へ行つた時、「日本が来て我々を統治してくれたお陰で、農業のやり方を沢山、教わりました。それで収穫量は大いに増え、我々は自活できるようになった。その意味で日本人々がここに居てくれたことを心から感謝しています」と。

アメリカはこのためアフガニスタンを攻めています。オサマビンラディンは間もなく捕まるでしょう。ただ、アメリカという国は日本と戦つた時、原子爆弾を落して何十万という市民を殺していながら、申し訳ないの一言も言わない国です。アフガニスタンで、新兵器を使って国民を次々に殺しています。オサマビンラディンその他の容疑者を捕えて裁判するでしょうが、また東京裁判と同じようなことを、仕でか

と聞き返したのです。私は首を捻りましたね。今の教育は国家日本についての教え方が足りない。この意味さえも分らんようではどう仕様もないと感じました。私は満洲のハルビン郊外と、北支、北京郊外に建設機械の製造及び修理の工場を作り上げました。その為、度々指導に行つております。それも白費です。ある時ハルビンや北京の人々から「日本には昔、教育勸語という立派な文章がありましたね。日本の文部省は何故このことを国民に教えようとしないのですか」と聞かれたのです。

それはその会社の姿勢が、この教育勸語を基本にしているからこそ会社の内容も良いのだという意味あいだで発言したのであるかと思ひます。

教育勸語は確かに素晴らしいもので、靖国神社では教育勸語原文と現代口語文を併記した印刷文を無料配布しておりますので、私はこれを大量に貰い受け各所で配布しております。天皇陛下万歳の意味すら理解できないような教育、教師の在り方はどこか間違っている。教育基本法に問題があると思ひ、友人である代議士に話をしております。

さて、最後に私はサイパン島、テニアン島にも行きました。それから九州の曾ての飛行基地であつた所にも

ご出席の一部の方々と一緒に慰霊巡拝をして参りましたが、グループで前委任統治領であつたサイパン、テニアンへ行つてみませんか、当協会の理事の方々にご検討をお願い致します。菅原 目下次年度(平成14年)春に洋上慰霊巡拝するよう立案計画中であります。(平成14年5月21日、24日実施)

森木 はい。皆さんと共に参りましたという気持で申し上げます。以上菅原 では藪下さん。どうぞ。

藪下 先程からいろいろ少年飛行兵の話が出ておりますが、少年飛行兵には操縦、整備、通信と三分科がありまして。入校して一年間は予科士官学校と同じように全員が一緒に教育を受け、一年後、適性によって分科が決定し、操縦は宇都宮・熊谷、整備は所沢、通信は水戸、大々の上級校に別れ、約一年四ヶ月の教育を受けたわけです。

整備、通信の者は19年7月に夫々の上級校を卒業しました。三航軍、四航軍に配属された同期生は勇躍、壮図につき、南方戦線に出発して行きました。そして三航軍に配属された同期生は再度、マニラを出港し、19年10月18日、

コレヒドール沖で敵潜水艦に捕捉撃沈され、約90名が戦死しております。その当時の事情については助けられた方

がおられたので、殆どの状況を掌握してあります。南方戦線に行った同期生の整備、通信の人は乗る飛行機も無いので、フィリピンの陸上戦に参加ということになりました。そして歩兵部隊に編入され、分隊長として切り込み隊を率い、アメリカ軍の物資を奪いに行くという戦法を遂行する中で、このフィリピンでは約10名が戦死しております。

飛行機乗りを希望しながら整備や、通信に回され、そのため操縦より一足早く第一線へ出て戦死をした同期生は操縦よりかなり多かったです。一方操縦は教育期間が長く、学校卒業後も戦闘・爆撃・偵察の各教育飛行隊、錬成飛行隊に配属され、訓練の連続でした。時既に敗戦の色濃く、私は希望した爆撃ではなく戦闘の方に回され、大体80%程が戦闘でした。そして教育が終るとすぐ特攻で戦死した者もおります。そして残りの者も概ね特攻隊要員として各部隊に配置されました。配置されたもののガソリンの欠乏で訓練もままならぬ状況でした。それでも同期生では44名が特攻で突入戦死しております。また特攻訓練中、種々の事故で殉職した者が9名おりました。

私個人のことになりますが、レイテ作戦も終了した頃、下館の第12飛行団飛行第1戦隊へ配属になり、そこで訓

練を受けました。20年6月に入ってから高萩飛行場へ移り、そこで飛行訓練を続けました。しかし部隊の使命はあくまで首都防空にあったわけで、その合間に特攻の訓練も併せて行ったというわけです。首都防空戦では夜間のB29との戦闘では57期の佐伯中尉以下、下士官6名が戦死されました。

我々が特攻命令を受けた時の隊名は第17神鷲隊と第173神鷲隊で、この2個隊が終戦までベアを組んでいました。この中で下士官は全て14期で4名づつ計8名で本場に気の合った連中でした。ただ残念だったのは敵襲がある度に我々の特攻訓練が中止になったことです。戦隊長は防空戦闘に主眼を置いておられました。戦隊長は四至本大尉です。結局、我々は最後まで温存されていたという状態でした。

上部から「特攻隊だけは最後まで残しておけ」と言われていたのかもしれない。高萩飛行場で、六、七、八と三ヶ月特攻訓練を行っておりました。ただ7月18日朝、突如として出撃命令が出たことがあります。覚悟はしていましたが緊張しました。身支度を整えて、お世話になった家々にご挨拶をし、そのあと、戦隊のトラックで飛行場へ行きました。待機中の飛行機のブローペラが薄暗い中で回転しております

た。それが光に反射して不気味な光景でした。いよいよこれで最後かと覚悟を決めたわけです。あの命令は本當の命令であったのか、戦隊長が訓練のために命令したのか疑問に思っております。戦後、奈良で開かれた戦隊会の折、戦隊長に尋ねましたが、戦隊長は笑ってとうとう返事されませんでした。

あの時の戦隊長の訓示は「下志津の司偵機が海上で、敵機動部隊を発見したが、確認するまで待機せよ」でした。待機せよと言われ、解散した時はどっかりと腰をおろし、思わず草と土を服のポケットに入れて大地との別れを惜しみました。まだ18才でしたから感傷的になっていたのだと思います。内地にいる一般の人は敵の空襲で沢山亡くなっているのに、我々は飛行機という兵器を与えられている。これで戦死するのであれば本望だと考えていました。解散後30分程してから、また集合をかけられました。これでいよいよ別れだなどと思いましたが戦隊長から「先程の司偵情報は誤報であった」と説明があつて、本場に解散となりました。

何か呆然として飛行場の片隅に腰を下ろして、しばらく考え込んでしまったことを覚えています。その頃、特操1期の家城啓一郎さんも一緒でした。ご存知NHKの解説委員をしていた

有名人です。あとで話する機会があった時、彼が言いました。「お、藪下よ。あれは戦隊長が何も言わなかったところをみると、戦隊長が命じた訓練じゃないかな」と。戦隊長が亡くなられたので、この問題は永遠の謎となつてしまいました。その頃、我々の待遇は大変に良く、民家に宿泊し、羽根布団が支給になったり、また航空食糧も度々支給されましたので第一線で亡くなつた戦友達のことを考えると大変に申し訳ない気がしました。終戦の時は、誰もが感傷的になり、家出して、亡き戦友の後生を弔らおうかと真剣に考えたものでした。その頃です。海軍の厚木飛行場から決起を促す一機が飛来して来ました。しかし飛行団長は頑として受け付けず、全機ブローペラと車輪を外され飛び立つこともできない状態になりました。その時、飛行団長は我々に「戦争は終わったのであるから無益な抵抗をせず、今後は国の発展に尽すよう」と訓示されました。第12飛行団長は鈴木五郎中佐です。この方の訓示で皆の気が落ち着ついたと思えます。今でも、そう考えています。

我々同期は80名入校し、その内384名が戦死しております。毎年一回、同期の慰霊祭を各県持回りで行っております。また我々の上部団体の少飛会は1

期から20期までで構成され、毎年10月20日前後に靖国神社で慰霊祭が行われています。それから我々は「昨年「少飛14期生の歩み」という本を出版しました。借行社の事務局でも取扱いをお願いしております。少飛会は段々高令化していますので、平成16年に解散を予定しております。以上です。

菅原 では次に牧さん。

牧 では黙を承りまして申し述べます。

戦況も熾烈を極めておりました昭和20年2月、第19教育隊飛行隊所属の若干17才から18才の我々少年飛行兵15期生に、特攻志願の要請があり、比島での富嶽、万葉両隊以下、多くの特攻隊が敵艦船に体当たり攻撃を行い、多大の戦果を挙げたが、その後の状況は

わが方に不利となりつつあることを知らされました。国を護るため、よく考えた上で申込みせよとの要請を受けました。我々は会津若松の白虎隊の若武者のごとく、年令も17、18才で昭和の白虎隊でありました。大空に憧れて少年飛行兵を志願した時から、一命を国に捧げる覚悟が出来ておりましたので危急存亡のとき、内務班全員申し合わせ、血書を認めて志願しました。数日後、24名が選考指名され、即第53航空師団に配属となり、第95振武隊、第96振武隊と命名されました。

それでは終戦前後のことにつき述べます。8月14日、突然「お前達にもそろそろ命令が下るので、娑婆の垢を落してこい」と言われて、都城近辺の温泉に行き、その夜は軍歌を歌い、浩然の気を養い、心の切り替えも出来、何時出撃命令が出て「少飛魂」で突入しよう、と、一同で誓い合いました。

翌朝、梶原、大谷両隊長が見え、我々に「本日正午、畏くも天皇陛下のお言葉をラジオで拝聴するから、全員正装で広間に集合」と言われました。生れて初めての玉音、感激することしきりでした。正午に玉音放送が始まりましたが、ラジオの雑音が激しく、お言葉の意味がわかりませんでした。

しばらくして、一応部隊に帰ることになり、準備して待機していたところ、日本が連合国に降伏したという信じ難い言葉を聞き、わが耳を疑いました。隊に戻りましたら、三角兵舎内の各自の拳銃と布団が撤去されており、どうなっているのか、さっぱり分かりませんでした。隊長が急いで来られ「我が軍は降伏したのだから武装解除により兵器類は総て没収、各自銃剣及び私物の軍刀も全部一ヶ所に集めよ」とのこと

昨日まで特攻として生死の狭間にあった自分は今解放され、帰郷することになりました。その時の心境は尊い命を捧げられた英霊に申し訳ない気持ちと感謝の思いで複雑でした。このような心境をあからさまに申し上げることはお許し頂きたい。

8月17日、日豊本線で下関に、ついで山陽本線に乗り換え、あの原爆投下され焼土と化した広島を車窓から眺め、戦争の悲惨さを改めて噛みしめながら8月18日、故郷に帰った次第です。母親に帰宅の挨拶、互いに手を取り合いました。その時、母は溢れる涙を抑えながら只一言「御苦労さんでした」

あの子の涙の一言を今も忘れることが出来ません。以上です。菅原 それでは後一時間ありますが、これから、司会としては前段、後段に分け、ポイントを二つに絞って進めたいと思います。始めに、やはり特攻が命令であったのか志願であったのか、この点についてはいつも驚しく取り上げられているわけですが、今までのお話の中で海軍では現実には命令書を受けた方もおられ

ました。それから吉武さんも、乙種学生で、教官、助教、学生渾然一体となって希望とか意思とか問われることなくフィリピンへ行かれたようです。それ以外にも何か、戦後になって初めて、振武隊か神鷲隊かが分ったという発言もありましたが、そういう中で、コンピューターの命令か志願かと割り切るほうがおかしいのですが、その

辺で、皆さん方の直接体験乃至はご意見があれば自由に述べて頂きたいと思えます。それと「希望する者は一歩前へ」ということがあったのも事実でしょうし、熱烈志願、志望、志望せずという項目に○印するのもあった。そのあたりを含め、ご意見、ご発言をお願いいたします。

小川 「特攻隊希望者は一歩」と言われた時、ある戦隊では全員15名が一歩前へ出たそうです。二、三日してから編成は12名だから3名は原隊へ帰れと言われて復帰しました。これは明らかに志願であって命令ではなかったと言っていました。私が20戦隊へ行った時の特攻隊員は戦隊長直接の命令でした。佐々木 昭和20年の春以降は殆ど、トッブダウンではないでしょうか。内地の部隊については知りませんが、南方へ出た部隊についてはある程度、そういうことがあったように聞いています。

内地部隊は私の隊も含めて、そのとおりです。もちろん嫌だという感覚の者は居なかったと思います。むしろ19年の秋以降、比島に派遣される頃は、上司に是非行かせてくれというようなことを積極的に上申していたことが思い出されます。

深川 いわゆる志願か、命令かについて申しますと、命令以前に志願しているわけです。特攻隊員の日記を見ますと、若杉少尉は昭和19年10月21日付日記に「後藤中尉殿、水戸より帰隊せらる。飛行師団長閣下ヨリ人秘封書アリ。曰ク決死隊要員ヲ募ルト」とあります。これは常陸教導飛行師団のことですが、明野教導飛行師団でもあったし、銚田教導飛行師団でも同様であったと思います。その頃志願するか否かについて打診があったことは間違いありません。私が居た明野本校では10月下旬のある日、夕食後、学生舎の57期全員に非常呼集があり、廊下に並んだ我々に「一人一機必死攻撃の要員を募る」と話があり、ついで「応ずる者、一步前」と述べられました。私はグーッと来た感じの一呼吸と共に、足を踏み出しました。一列横隊の全員がそうでした。

その後も特攻隊が編成されますが、これは命令です。命令のない軍隊は成

り立ちませんから、命令つまり任務付与というのは当然のことです。たゞ始めの段階としては「どうだ」という打診があったということはこの日誌でもはっきりうかがえます。

註 若杉少尉(陸士57期)の当日の日記は「師団長閣下へノ血判忘ルマジ」と続く、若杉少尉らの殉義隊は12月21日、フィリピン・バナ

菅原 次に敷下さんどうぞ

敷下 私は6月、部隊において正式に

特攻編成となりましたが、やはり錬成

飛行隊を出る時、あとで考えると随分

おかしな話だなと思ったのは、志願に

関しては部隊によって種々あったとい

うことです。我々のところでは人事係

の准尉が皆を集め、現下の状況を説明

し「この中で特攻を志願する者はいる

か」という程度だったのです。戦後、

いろいろな本を読んでみても多様な受

け取り方があったのだなと感じました。

錬成隊では人事係准尉が話されたあと

希望する者は班長のところに申し出る

と言われ、大半の者は志願致しました。

昭和20年3月末頃、錬成飛行隊にお

ける希望聴取は全部終わりました。そ

して早い人は3月末には明野の飛行学校

校となり、逐次転出して行きました。

明野へ行った同期の連中は、最初に戦隊へ行けると、喜んで行きましたが、その人達は20年4月に一番最初の特攻として戦死しております。私達の転出は最後の5月頃でした。

下館の第12飛行団に転属を命ぜられ

ました。そして任地で、飛行第1戦隊

所属になり、6月には特攻編成にな

つたわけでした。

志願か、命令かという問題は、形式

的には志願であるけれども、当時の日

本男子の気持としては志願せざるを得

ないような状況であったと思います。

中には台湾から出撃した誠第10飛行

隊の人の話を聞くと「俺は血書志願し

た」ということでしたが、それでも生

き残った人が居ります。

特攻出撃したけれども、何らかの原

因で帰って来た方々が非人間的な扱い

を受けていたと聞いて本当に不当であ

たなと感じました。

当時、福岡にあった振武寮という所

へ入れられた人の話によると、そこに

は種々な出身の人が居たとのこと

です。精神的に大分絞られたそうです。

今でも生存している人の話で、その

実態を知ることができました。

牧 今、敷下先輩の話に関連しますが

少年飛行兵13、14、15期は錬成飛行隊、教育飛行隊を大体終えておりましたが、

基本操縦教育を受けた位の実力でした。15期は特にそうでした。14期以前の人達は錬成飛行隊へ大部分が移りましたが、15期は大半が教育隊におりました。ご存知だと思いますが、空中勤務の中心を担うパイロットは少年飛行兵出身者が多かった。支那事変以後の航空戦死者も少年飛行兵出身者が多かったのです。我々が第19教育隊に在隊中、萬

葉隊の話が聞かされました。半ば強制的と思われる部隊長の訓示でしたが、

それでも我々の班は志願のため全員血

書嘆願しました。

先程、敷下さんが言われたように、

内務係の准尉だったと思います。それ

に班長が加わって人選したのでしょ

う。大体、次男以下が選ばれて、長男は全

部、はねられたよう

です。

東京陸軍航空学校に在学中、中隊長

の精神訓話等で教育を受けていました

から「死」についての恐れはありませ

ませんでした。特攻隊要員に指名された時

は非常に嬉しかったことを覚えており

ます。

我々は今、こうして元気で、年一回

行われる少飛会の慰霊祭に戦時中、6

航空司令官であられた菅原閣下はお元

気で居られた頃、必ずお参り頂きまし

た。少年飛行兵は国のため、命を捧げ

たことに閣下は思いを至され、毎年ご

家族に付き添われてお参り頂いたのだと思えます。

皆本 先程、敷下さんがおっしゃられたお考えに私も同感です。

振り返ると船舶特別幹部候補生制度を設けたのは、その狙いの主体が海上挺進戦隊の要員確保と考えられます。

陸上57期では戦車、工兵から船舶に転科しましたが、その狙いとするところは、やはり海上挺進戦隊の中隊長要員にあつたと思います。外国でも志願か

命令かについて大変、関心があるらしく、この3月(平成13年)「ドキュメントリー第2次大戦」という題で、アメリカのドリムワークス社が制作した映画が12月頃封切りされると聞いています。(9/11のテロ事件で延期)

これは「セービング・プライベート・ライアン」という第2次世界大戦の映画を作ったスピルバーグ監督がプロデュースしてまして、そのスタッフである

ステファン・アンブローズ博士が来日されました。私はその方から、3時間ばかりインタビューを受けました。その中に「16、17才で」…これは特別幹部候補生のことですが、「特攻になる

決意をしたのは陸軍の厳しい徹底的な精神教育がそこまで追い込んだのではないか」と問われました。

私は「日本には侍、すなわち武士道

精神が脈々と息づいており、国や自分の郷土を命を懸けて守る美風があります。苦難のときに現れて来たものであり、戊辰戦争の時、会津の白虎隊が命を捧げ、城を枕に見事な若武者ぶりを発揮しました。明治6年の軍制後、この良き伝統を踏まえて軍の気風は立てられたものと思う」と話しました。

もちろん通訳を介しての話ですが、アンブローズ博士は頷いていました。理解して貰ったなと感じております。

菅原 あとは何か、無いようですので海軍に移ります。

荒井 私は第30震洋隊におりました。全部で100隊あり、全部志願でした。多賀谷 回天も志願でした。私達は元

来が予科練です。陸軍少年飛行兵と同様に純粹であったことは間違いないと思います。この純粹さというのは国の教育と伝統の中にあつたと思います。

私達は生れて以来、忠君愛国という教育の中で育つて来ましたが、命令として受けたという意識は全くありませんでした。希望する場合には「二重丸」を付けると言われた時には、全員

が二重丸を付けたと思います。しかし戦後に出版された本の中には、そういうのは間違っていたとか、こうであつたとか、あつかもそれは志願ではなかつた、命令であつたかのような記述もあ

るのです。これは語弊があるかと思えますが、そういった出所は殆ど予備学生の人には多いのです。我々予科練出身者の中では命令で出たのではない、自分から志願して出たのだという意識が強いのですが、予備学生の人達は学徒

出陣そのものが命令であつたか志願であつたかということが問題になつてい

るようです。それはさておき、私達の接していた回天隊の上官で、海兵出の方と予備学生出の方とは自ら違つていたと思いま

す。海兵出の方達は、いわゆる職業軍人であり、そういうための教育を受け

て来たわけですから。予備学生の方達は同じ中尉であっても抱いている理念が違います。だからその当時、同じように

見えたかも知れませんが、戦後、執筆する時には、その違いが異なる活字表

現として違いが表われて来るのではないかと思えます。従つて我々予科練では志願、予備学生の方は、部命令であつたと

言われております。以上。奥野 私は予備学生として潜水学校で実科教育を受けている時に、昭和19年

7月に入り、8月の末に、いわゆる特攻隊に志願するか、しないか書類提出せよと言われた時、何のことか分から

なかつたのですが、回天、特殊潜航艇の要員募集だと噂が流れたのです。私自

身は閉所恐怖症で潜水艦乗りだけは絶対に嫌だと思つていました。○か×を付けて出せと言われましたが、×を付けた者はいませんでした。私は一重丸にしました。中には二重丸、三重丸を

付け血判する者もいました。一重丸としたのは私を含めても名おりました。教官に呼ばれ「お前は二重丸を書いたが、死ぬのは怖いか」「お前はどうかだ」「お前は」と一人づつ聞かれたのです。私は閉所恐怖症のことについて

は触れず「私は現在魚雷艇々長としての教育を受けております。この艇が非常に気に入

り、魚雷艇乗りになりたいと念願しておりますので一重丸にしました」と答えましたが、本当に回天なり、特潜に行くのは怖かった。閉所恐怖症として正直に申し上げます。水上であつたら何処でも行くというつもり

ではありません。死ぬのが怖いというわけでは

ありません。教官に詰問されたという経験があります。以上です。

菅原 残り時間が35分になりました。先ほど森木さんから9月11日(平成13年)ニューヨークで起きた自爆テロについて発言がありましたが、あの事件以来、ひとしきり「特攻」という言葉

が安易に飛び交いました。確かに戦闘行為であつた日本の特攻と、何百人という一般人を道連れにするようなテロ

とはどうにも相容れないものがあるわけです。只、森木さんはテロ実行者の心理に少し触られました。それから小川さんは突入して死んだ人の気持ちについては死んだ人しか分からないのではないか、生き残った者が知ったかぶり、いろいろ言ってみても推測の域を脱し得ないということをおられます。確かにそのとおりだと思います。また森木さんの発言にもあります。日本国内より外国で評価されているような点。これらのことを含め、特攻という事実を総括してみるのが、この座談会の課題ではなからうかと思えます。これらのことに残り時間を当てたいと思います。小川さん、先程の発言をもう少し敷衍して下さい。

小川 特攻隊員と起居を共にし、何れ自分も出撃するという状況の中で感じ、思ったことはいろいろ記録を見て書かれている特攻本の記述とは根本的に違うだろうと思います。私が知り、接した人達は死を恐れていなかった。言い換えると死も無ければ生も無いという心境だったと思います。つまり、そこには死生一如という言葉が一番的確な表現であった。特攻隊員の中には涙を浮べた人もあったと聞いています。この涙は何であったのか、今となっては分からない。只、私は特攻について語るといつでも涙が出ます。本当です。乗って行く飛行機が無くて出撃できなかった。そのことが今でも心に引っかかっています。特攻隊という文字は格好よく眼に写りますが、その心の中を穿った形で書くということは特攻隊員に対して非礼に当たると思えます。荒井 私は予科練でしたから本来なれば飛行兵になる苦でした。こと志と違って震洋隊に行きました。震洋隊は飛行機と違い、始めから特攻用兵器として作られたと聞いています。本当の意味で特攻と聞いています。その震洋に志願しました。この特攻兵器の搭乗員として志願したのだということをご記憶願いたいと思います。

菅原 残り時間も少なくなりましたが、どなたかご発言は。小川さんどうぞ。小川 特攻は敗戦後の媾和条約を有利に運ぶための作戦だという意見も一面当たっていると考える方もあるのではないかと。私は今まで、その点について考えていました。げに特攻とは純粋な忠誠心から発し、そして死んでいった。命を捧げて国のために散華したのだと。片や特攻という戦法を取るような日本と安易な媾和を結んだら大変な目に遭うぞと思わせるために特攻で死ぬのだと考えた隊員がいたと考える人間もいる。これらの点について、いろんな人々に直接会って意見を聞きました。実戦を経験した人、戦後生れの青年、成人等です。殆どの人々は「媾和条約を有利に運ぶために特攻に行ったなんて嘘でしょう」と言いました。この媾和条約云々については作家の山岡荘八が従軍記者であった時のことを書いた田中尉という人が出て来ます。彼は大分師範出身の学徒兵ですが、特攻出撃に当って、敢えて志願する上での一つの考え方を述べたのだと思います。その話について私は何人もの人から聞きました。その頃、日本政府はソ連を通じて和平工作に入っていました。その辺りのことが山岡荘八は頭にあって、西田中尉の口を借りて言葉にしたのだらうと言う人もいました。私もこの話は山岡荘八がその理念を西田中尉の言葉として語っていると思います。これが私の結論です。

菅原 わかりました。それでは森木さん、お願い致します。森木 では最後に一言だけ。先程私の発言についてご意見がございましたが、私が両親に対する遺書の終りに「天皇陛下万歳」と書きましたのは特別攻撃隊の命令を受けたからです。その時の心境はこうです。大日本帝

国のために、尊敬する天皇陛下の万歳を申し上げて死ぬんだということでありました。ところで、ニューヨークの貿易センタービルに突入した連中は、アララの神によって聖なる地位を与えられるんだという信仰だけ。それ以外は考えられない。確かに笑って、喜んで死んだということは分るけれども、根本的に私達特攻隊員とは違うと思います。

菅原 最後のまとめとして最上理事長 お願い致します。最上 私は昭和18年、広東にいた時に腎臓を患って、航空本部へ配転になりました。19年の3月上旬、参謀本部は敵艦船の攻撃に、飛行機による体当たり戦法を採用することを決めて、航空本部に案件を廻して来ました。

航空本部では本部長（航空総監）以下全員が反対したので、3月下旬に、安田航空総監は更迭され、東条参謀総長と共に参謀次長に就任していた後宮大将が航空総監を兼務することによって、参謀本部の意図を徹底させようとなりました。然しながら新総監が就任後直裁した会議の席上で、特に中堅幹部が強硬に反対意見を述べたため、総監の決定でこの会議は無かったことにされたということが、当社の戦後回想録に残されています。

貴重なパイロットと飛行機をたった一回の攻撃で消耗する様な戦法は、採用すべきではないという理由です。

両本部の話合いの決着が着かない俣に半年余り経過した9月25日の合同会議の席上で、反対の急先鋒であった丸川文雄さん(当協会前理事長 故人)がどうしても特攻をやれと言うなら、陸軍には率先垂範ということがあるから陸軍大將からやって頂きたいと発言したために会議は有耶無耶の裡に散会となり、会議に関しては緘口令が敷かれたことがあります。

処がその3日後の9月28日に参謀本部は大本営陸軍部指令(大陸指)を発動し、有無を言わず特攻戦法の実行を航空本部に命じて来ました。その裏には、海軍から特攻戦法の採用を強く要請されたことが理由であったということも丸川さんから聞きました。

6月19日、20日のマリアナ沖海戦で空母3隻を失った海軍は8月、9月に更に2隻の改造空母も沈められて、敵艦船を海上攻撃する航空戦力を喪失し陸上航空基地からの攻撃に頼らざるを得なくなりました。而も圧倒的な物量差のある中では体当り攻撃以外の手段は無いと考え、陸軍に共同歩調を取る様に求めて来たものと思われま

す。陸軍はそこまで追い込まれてはい

ない。飛行機も人員も未だ未だ健在であり、航空本部としてその様な戦法の採用を考へることは出来ず、半年余に亘って参謀本部に抵抗したが、遂に押し切られたというのが真相と思われま

す。その時期は何時頃かは、何も資料が残っていないので分かりませんが、大西中將が東京を発ったのが10月の6、7日頃、途中台湾沖航空戦で足止めされてマニラ到着が17日、そして10月25日には関行男大尉以下の敷島隊が出撃しました。この辺りを考えると、海軍自体が航空特攻戦法の採用を決めたのは、マリアナ沖海戦後ではなく、9月に入っ

てからではなからうか。そして直ちに大本営陸軍部連絡会議に持出して来たと考えるのが妥当と思われま

す。航空本部の反対を強引に抑え込むことを躊躇していた参謀本部も、戦局全般を考慮して「大陸指」の発動に踏切ったものと考えられます。更に一つ、私は軍法会議の裁判官を命ぜられたことがあります。昭和20年7月に法務官でもないし、その任ではないと思っておりましたが、軍法会議の裁判長は正規の将校が裁判官になるのでありま

した。法務官はあくまでも裁判長の補佐役だと聞かされました。裁判は、法廷に一人、一人順に被告を

こんなこともありま

した。その件は戦友のマミヤシックス(写真機)を盗んだという事案です。判決を出すために3人の法務官と一緒に法廷の後部室で協議。前例などを参考に懲役1年から3年と一応の結論を出したのですが、こういう破廉恥罪に対しては懲役3年の判決を言い渡し、結審しました。そうこうしているうちに、廊下から「殺してくれ、殺してくれ」という喚き声が聞こえて来たのです。被告が入って来ま

したので、その書類を見たら「特攻忌避」とありました。彼は回転しているプロペラに手を突っ込んで左手切断したため、前述の罪状で軍法会議に廻って来たのです。本人は悔悟の念が極めて強く、戦友は皆特攻戦死しているのに我身は如何と反省している。いろいろ調べているうちに、彼は3ヶ月前に結婚していることが分かりました。上官から「特攻を志願する者は一方前へ」と言われて

彼は勢いよく前へ出た。そこで翌日も出撃ということだったが、何日経っても出撃命令は出ない。数ヶ月経ってしま

った。そのうちにいろいろ女房のことも考え始めて、何とかして行きたくないという気持ちに変わって来たのです

な動きもあるということ

です。その時、私は法務官に「どの位の量刑が適当か」と尋ねたところ、「戦線を忌避した場合、極端に言えば死刑もあり得る」との答でした。また一番軽い刑については懲役3年位との説明を聞きま

したので私は「懲役3年」と判決を書いたことを覚えております。特攻に關してはいろいろなケースがありました。この辺りは事実関係を素直に認めなければならぬと思

います。本日は体験談をいろいろ語って頂き有難うございました。私の話はこの辺で終ります。菅原 有難うございました。ご出席の皆さんに心から感謝申し上げます。それではこれにて閉会と致します。初

の頁に出ている自決した西川中尉の遺書。 「私は独断、皇国の再起して、遂には世界の中心たり得る事を固く信じつつ、愛機と共に、我が浅間山頂に鎮ま

る事に決しました。私は朝夕浅間山頂より皇国の、郷里の勃興を静に見守って居ります。立ち上がる煙を見ることに、思い起こして下さい。敵として、山頂に愛機と共に在ります。私の処置は憂むべき事では有りませんが、決して皇軍將校、就中、特別攻撃隊長とし

て、悪い処置ではないと信じます。只最後まで部下の面倒を見てやれなかったのが心残りです。父上、母上には誠に申し訳ないと存じます。何一つ孝行をして上げる事も出来ず、尚私一人、先に死ぬと言ふ事は不孝、此の上なしと存じて居ります。只、生命は既に、なかったものにしてあきつめて下さい。然し、私は決して死にはしない心算です。皇国勃興の暁までは、浅間山頂に廠として生きて居ります。これだけしんじて居て下さい」等とあった。18日早朝プロペラを外す前に離陸し、岩村田小学校の校庭に遺書を投下、超低空で自宅の上空をかすめて翼を振って、8時10分自爆した。



どの枝に宿り給うか君が霊

終戦時自決した者(空挺部隊の部) 塩田 金吾

戦争末期挺進飛行第一戦隊は北鮮の威鎮で戦力回復中だったが、ソ連の侵入に伴い新義州に移動しここで終戦となり、大郎に移った。一個中隊は内地に物資空輸を命ぜられ、その中に塩田金吾大尉がいた。

塩田大尉は少年飛行兵出身、少尉候補者21期、飛行戦隊の中堅操縦者で、比島の空を縦横に飛び回り幾度か死線を越え、数少ない生き残りだった。立

川に飛び予定か天候不良のため米子に着陸し、搭載物を引き渡し任務終了した。ここで塩田大尉は「我がこと終れりぬ」と自決した。

この人は水彩絵を能くし、子供の戯れる姿を画くのが得意だった。今残る一枚は、表に童子を画き裏に次の一首が認めてある。

武夫の心偲びていざ往かん

秋月の桜別れして吾も

於 高鍋秋月城跡

昭和二十年三月十二日

塩田中尉

竹田恒徳著「私の肖像画」抜
護衛機の自爆(一部省略)

八月十七日に私の搭乗機が満鮮の空に入ってから三日間、ずっといっしょに飛んで護衛してくれた四戦闘機と京城で礼を述べ激励をして別れた。かくて任務を終えた彼らが奉天に帰った時、すでにその日から、そこはソ連軍の占領下となっていた。そこで四機はただちに決心し、奉天南飛行場に突っ込んで壮烈な自爆を遂げたという。そのことは、深く私の胸裡にきざみ込まれ、いつまでも忘れることのできない痛恨の思い出となっている。

またある人を介して聞いた話だが、「昭和二十年八月二十日には、奉天南飛行場にソ連軍航空将校が進駐して居り、その将校と島田中佐(第26教育飛行隊長)の目の前で前記四氏搭乗の四戦闘機は急上昇反転のうえ、飛行場の真中に見事な編隊を保ったまま自爆されたそうぞうで、ソ連将校から理由を聞かれたのに対しては、日本では古来敗戦の場合武士道として腹を切る習わしがあるが、あれは飛行機乗りとしての腹切りであると答えた」ということである。



禅語に接し

特攻隊員の心情を偲ぶ

禅語とは禅の心を文字で表したものと禅宗の本に書いてある。しからは禅とは何かということになるが、釈尊のさとられた心を心としたのが禅であると言っている。仏教各宗派それぞれ言分があるからそれはさておき、禅語には我々のところに迫るものがあるが、意味深遠で受ける感じが人によって様でない。今ここにその禅語と特攻隊員の心情を結びつけるのも多分に主観的にならざるを得ないが、戦没特攻隊員の崇高な精神を宣揚する一助にもなるうかと、いくつか掲げてみる。

『雲は無心にして以て岫を出づ』この言葉は陶淵明の「帰去来の辞」にある。また寒山詩には『白雲高岫に閑』とか『白雲自ら去来す』という言葉がある。白雲は無心の意味する。私心が全く無いことである。

特攻基地第二国分の記「白雲にのりて君還りませ」という本に次の記事がある。

大塚晟夫 二十三歳 中央大学

第三草薙隊 名古屋

空 海軍少尉 20年

4月28日出撃 沖縄

近海散華

書き残された日記の一部

四月二十七日

昨日最後の訓練飛行があった。機を整備して帰って来たら、夜八時だった。疲れたのですぐ寝た。

いま朝の八時だが、九時から明日の攻撃要領の説明及び打ち合わせがある。戸外では蝉が啼いている。ミンミン蝉である。この日記帳、戦友柿崎に頼んで送る。

君達は一生懸命勉強しなければならぬ。これからの日本にはさらにさらに大いなる試練があるだろう。俺は天命によっていまの日本を救うべく、また両親及び君達を救うべく死ぬ。

彼の世とやらでも君達を必ず加護するから安心してほしい。今日は滅法天気がい。明日も必ず天気だ。快適な飛行日和だ。

いままた飛行場へ来て愛機の下でのノートをひろげた。午後一時半である。

午前中、隊長から作戦要領が話された。沖繩の嘉手納沖には、戦艦五はか数十隻ある由、それを皆沈めに行くの

である。

愛機は悠然として爆弾を積んでいる。これが皆、木々葉微塵となるんだから。人間の棺桶として、百万円はちよつと豪勢である。

出撃は午後三時と定まった。夕方敵地へ着く。いま午後十時、午後飛行機を整備して、夕食後、別離の盃を挙げた。

明日にそなえて早く寝る。ここへ来てから十二時前に寝たことなし。今日は早く寝る。おやすみなさい。

春の月が美しい。明日は満月だ。

願わくば母鑑の上に砕けなむ

その卯月の望月の頃

本当におやすみなさい。

父上、母上、おやすみなさい。

姉さん

淳子、知子おやすみなさい。

最後の眠りに就きます。

四月二十八日

今日は午前六時に起きて清々しい山頂の空気を吸った。今日やることは何もかもやり納めである。

搭乗員整列は午後二時、出発は午後三時過ぎである。

昔のことがいま俺の眼前を走馬燈のように順序不同に出て来る。楽しいこと、苦しいこと、俺の生活は僅か二十

四年とは云いながら、決して七十、八十の老爺のそれに劣るまい。

要するに爆弾で死ぬ者もいる。自動車で刎ねられて死ぬものもいる。三月初めの東京空襲では、本所、深川、浅草と、七万人余も焼死したとか。死を問題にしないのが現代の常識となつて来た。

外では蝉が鳴いている。

出撃のわが行祝う蝉しぐれ

昨日も慰問団が来たそう。ちょうど俺達は飛行場で整備していたが、彼等は帰るとき飛行場の端で、われわれの方を向いて土下座して拜んで成功を祈って行ったそう。

拜まれているのが俺だとはどう考へても不思議だ。そう聞かされると、必ず巧く命合せねば申し訳ないと思つた。お守りは胸のポケットに入れた。千人針は腹に巻いた。これらは皆いまま

で俺を守ってくれた。それを必死行に持って行くのは、皆の加護を捨てるように思うか知れないが、俺として送り難い。それで持って行かせて貰う。

淳子、知子からの人形も腰にさげて行く。命中に付きあって貰う。

午前十一時、これから昼食をとって飛行場へ行く。飛行機の整備で、もう書く閑暇はない。これでおさらばする。

乱筆、乱文はいつものことながら勘弁ぞう。
皆元気でゆこう。

大東亜戦争の必勝を信じ、
君達の多幸を祈り、

いままでの不孝をお詫びし、
さてさて俺はニッコリ笑って出撃する。

今夜は満月だ。沖繩本島の沖合いで
月見しながら、敵を物色し徐ろに突っ
込む。

勇敢に然も慎重に死んでみせる。

再拝

晨夫

『一期一会』(いちごいちえ)

一期は人間の一生、一会はただ
一度の出会いということ、
「会者定離」(えしやじょうり)も同
じような意味につかはれる。会う
が別れのはじめともいう。したがっ
て一回の出会いを大切にせよとい
う教えにつかうが、人生の無情を
託つことばにもなる。

さてこの言葉で思い起こすのは
義烈空挺隊の出撃を見送った新聞
記者と隊員の話である。隊員は西
島菊二六曹長と田中清一伍長であ

る。健軍飛行場を出撃したのは夕
刻であるが、その日の昼頃三角兵
舎に新聞記者が入ることを許され
隊員と思ひ思ひの話をした。この
二人の隊員とどんなことを話合っ
たかはわからない。

その新聞記者は戦後北海道へ帰
り、西島曹長と田中伍長の遺族を
尋ねた。そして翌年五月二十四日
(健軍出撃の日) 田中伍長の両親
に送った手紙がある。

——思出の五月二十四日が巡っ
て参りました。心静かに一周忌の
法要を心ばかり勤めさせて頂きま
した。

日々とうとくなる世の常でしよ
うが、御両親の御心中さぞかしとお
推察致しております。今夜は小樽
の西島曹長宅を訪れて仏前で心を
こめて読経して参ります。御地ま
では仕事や汽車の都合でお訪ねで
きぬのが残念です——

田中伍長の郷里は、北海道も最
果ての斜里郡小清水だった。

健軍における僅か一回の出会い
が、これまでに人の心を動かすと
は。これこそ一期一会と言はずし
て何んであろうか。

『残心』これも禅語の一つだが、
剣道や弓道でよく言われる言葉で
ある。一撃を加えた後、一矢を放っ
たあとの心の構えを言う。未練と
か心残りとは縁がない。何れにし
ても個人の精神の問題で、それが
形に現れるので、この言葉が生ま
れた。

ところで特攻精神が個人から離
れて 延々と続いているとみれば
先の新聞記者の行為は正に「残心」
といふべきであろう。そうならね
ばならぬ。

『語り尽くす山雲海月の情』

碧巖録にある言葉だが、気の合っ
た同士が心情を吐露して語り合う
ことで、しんみりした中味の濃い
話であって、大声で演説するよう
な場面ではない。

特攻隊員が 出撃を前に肉親と
語り合った一例を引用してみよう

緒方襄海軍中尉 22歳 海軍第

13期飛行予備学生 第一神

雷桜花隊 20年3月21日鹿

屋出撃 桜花発進前に撃墜

され戦死

以下靖国神社発行「いざさらば
我はみくにの山桜」より。

襄中尉より特攻隊員志願の決意を聞
かされた母三和代さんは、今生の別れ
に子の任地に赴くのであった。

うつし世のみじかきえにしの母と子
が今宵一夜を語りあかしぬ

これが、その折の和歌である。そし
て帰宅後、襄中尉がひそかに母の鞆に
いれていた辞世

いざさらば我は御国の山桜母の身元
にかへり咲かなむ を発見する。この
時、母三和代さんは

散る花のいさぎよきをばめでつゝも
母のこゝろはかなしかりけり

と詠じている。

その一夜親子でどんな話があっ
たのか、想像に難くない。

もう一つ事例を挙げてみる。

金山清軍曹は義烈空挺隊の一員

で、20年5月24日出撃散華。

昭和51年5月24日沖繩摩文仁台

上に義烈の碑が落成し、そのとき
読谷飛行場跡を遺族や戦友が訪れ
た。その中に金山軍曹の妹がいて、
付き添の若い自衛隊員に語りかけ

た。

「お蔭様で兄が戦死した場所を弔うことができました。遺骨の代りに紐の切れた鞆と落下傘の紐が届けられましたが、今日はここの土を遺骨の代りに持って帰ります。

兄は戦死したとき確か二十三歳でしたが、貴方と同じ位ではないでしょうか」

「僕も二十三歳ですが、昔の人は偉かったですね。自分にそんなことができるだろうか」

「私の息子も同じ年です。息子をみると時々兄のことを思出します。兄が休暇をもらって帰省したのは、四月の二十九日でした。そのとき落下傘降下の話をしてくれましたが、特攻隊になっていることなどは少しも言いませんでした。一晩母と三人、父の仏壇の前に枕を並べて寝ました。翌朝村外れまで見送って別れましたが、それが最後でした。一ヶ月後義烈空挺隊のことが大きく新聞に出て、間もなく兄の戦死公報が届きました。」

『吾が心は秋月に似たり
碧潭清くして皎潔たり』

「寒山詩」に出ていた言葉である。寒山詩には禪語にあてはまる言葉は沢山みえる。今ここで「月」に係わるものを拾ったみよう。寒山詩には個々の題はないので、何処に出ているか示すことは出来ない。

『月は照らして水澄澄
風は吹いて草獵獵』
『石牀に孤り夜座せば
円月寒山に上る』

『風は揺がす松竹の韻
月は現わす海潮の類なるを』
『夜に入っては明月に歌い
晨を侵しては白雲に舞う』

『白雲朝影静かに
明月夜光浮かぶ』
『独坐人の知るなく
孤月寒泉を照らす
泉中且つ月なし』

月はずから青天に在り』
「寒山詩」を三分の一ほど繙いただけで、これだけある、自然物では白雲が一番多くその次が月であるうか。

寒山は拾得と共に実在の人物かどうか不明だが、彼らが隠棲していたという天台山中の石壁などに

書かれていたものを、後の人が集録して詩集にしたという。

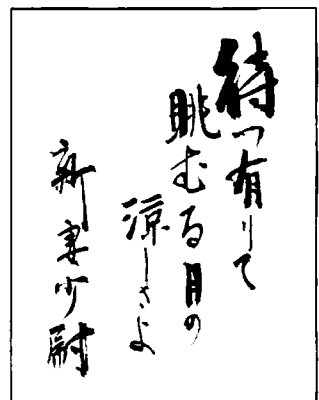
世捨て人の目に映じた月だから何の私心もなく、清浄にして穢れないものである。

さて、特攻隊員の見た月はどんなものだったろうか。
義烈空挺隊の飛行隊である第二独立飛行隊の新妻幸雄少尉の遺墨は

待つ有りて
眺むる月の
涼しさよ

新妻少尉

と認めてあって、日付はないが出撃ま近に認めたものである。これこそ禪語といふべきである。
第三独立飛行隊には陸士五十七期の少尉が五人いて、皆一語づつ書き残している。新妻少尉もその一人だが、後の四人は、荒谷猛少尉「必勝」、川守田啓志少尉「任」、小林真吾少尉「夢中求平正」、酒井義男少尉「祈皇国万才」と墨書している。頭に浮かんだ語句を咄嗟に書いたものであろう、甲乙をつける気は毛頭ないが、新妻少尉の一番印象的である。



既に一度引用したが、第三草薙隊の大塚辰夫少尉の書き残した文の一節

春の月が美しい。明日は満月だ願くば母艦の上に砕けなむ
その卯月の望月の頃

主題とは別に、月の盈虚えいこを取上げた禪語は見当たらないが、20年8月満月前後に決行する計画の、特攻作戦が二つあった。その一つは「クー8」滑空機に搭乗して、沖繩の敵飛行場を強襲する作戦で、もう一つは海軍の一式陸攻に陸海軍の精鋭部隊を乗せ、サイパンとテナヤンの敵飛行場に、殴込みをかけるというものだった。前者は福生で、後者は千歳で作戦準備中に終戦となった。

禅語二題

『風、疎竹に來たる、風過ぎて竹は声を留めず。雁、寒潭を渡る、雁去つて潭は影を留めず』
『竹影、階を掃うも塵動かず、月輪、沼を穿つも水に痕なし』

どちらも「菜根譚」にある言葉である。禅語というに相應しい。

前者にはそれに続いて「故に君子は事來たつて心始めて現われ、事去つて心随つて空し」と結んでいゝる。後者については「人常に此の意を持して、以て事に応じ物に接すれば、身心何等の自在ぞ」と述べている。

著者洪自誠は世間一般の士に語り掛けているので、勿論特攻隊員が念頭にある訳ではないが、ここに遺書遺詠で窺い知る特攻隊員の心情に照らし合はせて考えてみる
抑々禅語なるもの意味深遠、感じとること各人各様で、決めつけることは出来ないが、この禅語から連想する特攻隊員の言い残した言葉を挙げてみる。

“散る時が浮ぶときなり連の花”
これは飛行第四戦隊回天制空隊隊長山本三男三郎少尉の作で、山口県小月の蓮成寺にこの句碑がある

山本少尉はB-29に体当たりする特攻隊の隊長で、20年4月18日大

刀洗上空で体当たり撃墜戦死した。
松山高商出 幹候9期22歳、書き残した日記がある、その一部を紹介する。

昭和19年12月12日(第一回大隊編成の2日前)

空染む屍なんと崇高なるそして壮烈なる然も美しい響を持った言葉だろう。北九州の空で皇土防衛の第一線の責任の為に、B-29を身機一体となつて撃墜した野辺・高木機、それは単なる感傷的なもの即ち衝動ではない。純情にして烈々たる若人の心なのだ。平常の大信念を一つの事実として顕現せしめ

たに過ぎないと確信する。俺は云う「俺は死ぬのだ」と我々の世代が吾等の生命をもつて敵を倒さずして、何者が此の難局を打開して勝利へ導く戦機を掴み得るだろう。俺は死ぬ、然し俺は勝つのだ、勝利の黎明の鐘は高らかに俺達の腕でかつぐのだ。
人生二十五年何の感傷があるうぞ。
更に12月13日の日記。

忠節の心の根幹をなすものは報国の心である。「義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ、其操を破りて不覚を取り汚名を受くるなかれ」

と教へられている。此のお訓しこそ忠節の最高点のものだと考へられる。特攻隊の敢闘は此の忠節の御訓を最高度に發揮したものにしか過ぎない。
「骨ばこに小さくねむり帰る日のあるうと家族のものよ嘆くな」
昭和19年12月14日

特攻・第一回大隊編成直後の17日の日記。

身辺の整理も大体出来た様だ。遺書・遺爪も準備出来た、安川と母上とに書く、本日特攻隊一同・師団長閣下・戦隊長殿と一緒に記念撮影をする。

野畔の草召し出されて桜哉”これは第二十七振武隊長原田栗少尉の作である。早稲田大学出、特操一期、26歳、20年6月22日都城東飛行場出撃 沖繩洋上で戦死
同隊の絶筆集に次の通り書残してある。

——征くものは気易い 残るもの的心情にはホトトギスの慟哭がある 情は涙である そして愛は切ない されど忠はさらに至上だ
祖国よ永久に幸あれ——

《文芸欄》の新設

支那の先哲の言に「詩は志の之く所なり。心に在る志となし、言に発するを詩となす」とあります。戦没特攻隊員で志を詩歌に托した人が少なくありません。かつて志を共にした我々として、これに応えたいと思います。

短歌、漢詩、俳句、自由随想、何でも 我が協会の目的に添うようなものを出して下さい。但し随想は印刷して半頁以内に納まるものとします。それより長いものは《文芸欄》以外の原稿として取扱わせてもらいます。

靖国神社での思い

この奥に友垣あまた鎮まるを
思えばなどか胸迫りくる
君が霊何処の枝に宿るらむ
大和心のこもる桜木
幽明の境除かるこの庭の
居並ぶ木々に霊こもるらむ
白き鳩君が心をばばたきて
清く直きと我は覚えぬ

今期の戦史 ②

戦史に登場できなかった

ラシオ空挺作戦

ラングーンに前進

パレンバン作戦は日映いばかりの勝利に終わり、栄光に輝く第二聯隊は根拠地プノンペンに帰還したが、明光丸海難のため弟聯隊に先を越された第一

聯隊は、悲憤やる方なかった。また第二聯隊の各中隊にも、輸送機の制限で基地に残されてしまった残念組がいた。挺進団長久米大佐は、これらの者の統率に苦慮し、作戦参加を熟望しており、南方軍でも考慮するところがあった。

3月9日、ジャワ作戦は終了し、戦いの焦点はビルマに移り、挺進団もビルマに前進を命ぜられた。挺進団長はビルマ作戦に参加する部隊を次の通り定めた。

挺進第一聯隊の全力
挺進第二聯隊の一部

第三中隊、この中隊はパレンバンに翌日降下した中隊である。
集成隊 各中隊でパレンバンに行けなかった者を集め一隊を作った。

以上の部隊を第一聯隊長武田少佐が指揮し、3月19日プノンペン出発、鉄

道輸送でバンコックに行き、ここで乗船し、4月8日ラングーンに上陸した。

途中シンガポールに寄港したとき、第二十五軍がシンガポールで押収したトンブソン機関短銃三〇〇丁を、多数の弾薬と共に受領した。これは英軍の兵器庫に入っていたもので、格納したままだった。携行して降下できる寸法であり、船の中で射撃訓練まで行い、降下直後の近接戦闘に必勝の確信を得た。

この時点ではまだどのような任務が与えられるのか、全く知らされていなかったが、大陸的な戦場で壮大な撃滅戦が行われ、それに参加できるのではないかと、夢を抱いていた。

挺進団司令部は、4月3日プノンペンからミンガラトンに飛び、ラングーン市内に入った。ラングーンは、3月8日第三十三師団が無血占領したもので、市街はよく保存されていたが、アカップに残っている敵空軍が、夜間単機でゲリラ的に爆撃に飛来し夜の平穏を害していた。

ビルマ方面の航空作戦は第五飛行集團の担当だったが、挺進団はまだ南方軍直轄で、その使用に関してはなかなか決定しなかった。エナンジョンの油田地帯を、敵の破壊に先立ち占領するという案も出たが、四月十七日になっ

て次の命令が出された。

南方軍命令 4月17日、サイゴン
一、自今第一挺進団ヲ第五飛行集團ノ指揮下ニ入ラシム

二、第五飛行集團ハ左記ニ拠リ第一挺進団ヲ運用スベシ

一 挺進団ハ第十五軍ノ決戦ニ方リ「ラシオ」附近ニ挺進シ第十五軍ノ作戦ヲ有利ナラシム
二 挺進決行ニ方リテハ密ニ第十五軍ト協同ス

三 挺進セル部隊(空中部隊ヲ除ク)ハ第十五軍ノ師団長「ラシオ」到着ノ時ヲ以テ第十五軍ノ指揮下ニ入ラシム
四 天候及敵情等挺進行動ニ適セザル場合ハ本挺進作戦ヲ実施セザルコトヲ得

南方軍総司令官 伯爵 寺内寿一
第十五軍司令部はラングーンに、第五飛行集團は、ミンガラトンにあったが、間もなく両者ともトングーに移った。

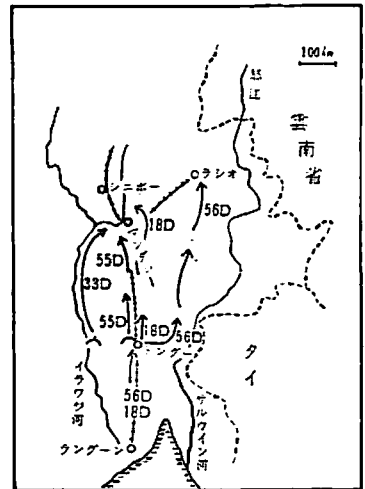
マン会戦計画と挺進団の作戦準備
第十五軍は第十八、第三十三、第十五、第五十六の各師団等より成り、軍の全力を挙げてマンダレー会戦を行い、ビルマ勘定作戦を完遂しようとしていた。

マン会戦の全般構想は、

軍ハ有力ナル兵団ヲ以テ「ラシオ」方面ノ敵ノ退路ヲ遮断セシメ主力ヲ以テ「トングー」―「マンダレー」道及「イラワジ」河ニ沿フ地区ヨリ重点ヲ右翼ニ保持シテ「マンダレー」方面ニ向ヒ前進シ敵軍主力ノ兩翼ヲ包圍シ「マンダレー」以西ノ「イラワジ」河ニ任倒撃滅スとなっていた。

マン会戦計画に基づく第十五軍の命令が下達されたのは、4月1日である。その時はまだ挺進団の起用は決定していないが、最右翼の第五十六師団をもって、神速に広かつ深く突進させて、雲南方面から出てきた重慶軍の退路を遮断し、大包圍圏を完成しようとした。そこで、第五十六師団がラシオ附近に進出して、大包圍圏を構成するのを容易ならしめるために、挺進団をラシオに降下させ、第五十六師団に追われて後退する敵が、ラシオに拠ることができないようにしようと考えたのである。

挺進団がラシオに降下すれば、第五十六師団前面の敵は退路を断たれるわけ、マン会戦の全般とは別に、ここでも包圍殲滅戦が成立することになる。第五十六師団は4月15日トングー東方地方を出発し、ロイコー、ラシオ方向



マン会戦計画の概要

に破竹の進撃を開始したが、追々と判明する敵情は、重慶軍の大部隊が前面に出ていることだった。

そこで問題となるのは、第五十六師団の進撃との関連で、いつ降下させるかということだった。挺進団の手持ち兵力は軽装備の歩兵六個中隊に過ぎない。しかもこれを二回に分けて空輸しなければならぬ。物的戦力では、米軍装備の重慶軍に対抗することはできない。一昼夜後には地上部隊と確実に提携できなければ危険であると、上級司令部では考えていた。マン会戦計画では、「第五十六師団ノラシオ方面進出ハ5月10日頃ト予定ス」となっている。この予測の外れが本作戦失敗の原因となった。

挺進団司令部は4月3日、聯隊は8日ラングーンに到着したが、飛行戦隊

を持つことになった。

4月23日、第五飛行師団司令部（飛行集団が飛行師団と名称が変わった）に挺進団はじめ関係部隊指揮官が参集し、空挺作戦の計画を研究し概ね成案を得た。その大要は、

5月5日頃、挺進飛行戦隊はトングー南飛行場から、物料投下の重爆戦隊はトングー北飛行場から発進し、ラシオの兵営及び飛行場を急襲するという計画だった。ところがその頃になると、第五十六師団は4月29日の天長節にラシオ突入を目指して北進中で、実現の可能性が出てきた。そこで挺進団側は繰り上げ実施を主張したが、まだ物料投下に任ずる飛行第九十八戦隊の集結が未完了で、著しく早めることは不可能だった。

挺進団は準備を急ぎ、27日か28日に

は南方軍の緊急輸送に使われていたので、遅れて23日頃ようやく集結した。このとき新たに編成した第四中隊が新田原から到着したので、「ロ式」が二個中隊、「MC」が二個中隊となった。これにバレンバン作戦時と同様に第十二輸送飛行中隊が加わり、五個の飛行中隊

決行という意見を具申したが、26日になって、第五飛行師団長小畑中将は29日に決行という命令を下達した。この頃の飛行師団には、ラシオ空挺作戦をあくまで実現しようという強い意欲は失われていたようだった。

挺進団の作戦計画

バレンバン作戦のときは、奪取すべき目標が飛行場及び精油所と明確だった。ところが今度は地上軍の作戦を有利ならしめるという包括的な任務である。雲南方面から南下した道路が、ラシオで分かれてトングー方向とマンダレー方向に通じており、ラシオは交通上の要衝ではあるが、ここを占領すれば敵の退却を完全に遮断できるというような、重要な地形はその附近にはない。

そこで、挺進団では敵の存在しそうなところに飛び込んで行き、敵を混乱に陥し入れて地上軍の作戦を有利ならしめようという考えに立った。この考え方は、挺進団長の訓示に明瞭に現われているので、ここに紹介する。

訓示

挺進団使命達成ノ好機ハ遂ニ来リヌ而モ天長ノ佳節ニ方リ意義極メテ深キ本作ニ挺進ヲ決行ス

栄光何カ比セン 眞ニ感激ノ極ミナ

諸子既ニ示セシ所ニ拠リ飽クマテ挺進兵ノ本領ニ徹シ 敢為積極進ンテ戦機ヲ構成捕捉シツツ全力ヲ奮ツテ任務ヲ完遂セヨ

御稜威ノ下必勝ナリ 敵ノ意表ヲ衝ク機動必中ノ火力及伝統ノ白兵威力ヲ随所ニ發揮シテ見敵必滅以テ相俱ニ勝利ノ大道ヲ邁進セ

右訓示ス

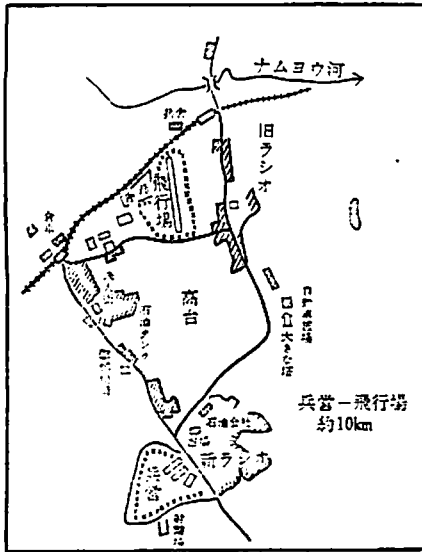
昭和十七年四月二十九日

第一挺進団長 久米精一

挺進団の作戦計画の文書は現存していないが、この訓示でみる限り、要点を占領して退路遮断に任じるといふ考えは窺えない。

敵のおりそうなどところに飛び込んでゆくとなると、第一目標は兵営である。これは町の南端にあることは情報で承知しており、航空写真で建物の配置も判明していた。しかし、そのとき兵舎に敵がいるかいないか、それは飛び込んでみなければ判らない。

兵営急襲隊を聯隊長指揮の三個中隊とした。輸送機五個中隊約四五機で、各中隊大半の人員を、一回で降下させることができる。武田聯隊長は兵営の直上に降下するという戦法を採用した。小銃や軽機はまだ身体に着けて降下す



ラシオ市街情報図

るまでになつていなかったが、概ね二人に一丁の割合でトンプソン機関短銃が行き渡った。機関短銃と拳銃、手榴弾で敵を摺伏させ、その後投下物料で武装を整え、残敵を掃蕩しようという考えだった。従つて事前の対地攻撃は、対空火器が現われたとき以外は行わないこととした。

次は引き返して来た輸送機で、飛行場急襲隊を降下させることとした。飛行場急襲隊は第一聯隊の第三中隊と、第二聯隊から出た二個中隊で团长直轄とした。飛行場は町の北方にあり、兵営とは十数キロ離れていた。

第二次降下は第一次降下よりも五時間ばかり後になるが、兵営に降下した部隊が、飛行場降下を掩護することは期待できない。飛行場に対しては奇襲

の利は得難く、滑走路の傍にはトーチカらしいものが航空写真に写っている。飛行場内にも兵営があり、捕虜情報によれば、この兵営は通過部隊用になっていて、収容人員は約三〇〇〇名ということだった。多数の重慶軍が待ち構えているかも知れない。

兵営と同じような戦法では危険であると判断した。そこで、司令部と各中隊から選抜した人員をもって強行着陸を編成し、重爆三機で強行着陸することとした。強行着陸隊は、超低空で進入して滑走路に着陸し、機外に跳び出すや否や軽機関銃で四囲を射ちまく

降下する。部員の田中中尉は強行着陸隊長となる。团长は副官らと共に、飛行場降下に引き続いて飛行場に着陸するという計画を立てた。ところが、团长機が着陸するためには、滑走路に散乱している落下傘を取り除かねばならぬという問題が起き、そのようなことに貴重な兵力を割くことはできない、という久米团长の意向で、团长機も強行着陸機に続いて着陸することになった。いかにも落下傘部隊らしい統率だった。

二回の降下で、司令部と部隊の大半は空輸でき、残った若干の人員と補給品は、翌日飛行場に着陸させるということとした。

発進、そして中止

昭和17年4月29日、天長の佳節、トングーの夜明けは薄曇りでむし暑かった。

〇七〇〇(日出は〇八〇六)兵営降下部隊は搭乗完了し、輸送機は始動を開始した。北飛行場では、物料投下の飛行第九十八戦隊が出動準備を完了していた。

〇七三五南飛行場では、第二十七戦隊の襲撃機が、サジ附近の地上戦闘に協力するため離陸を開始した。この攻撃は、ラシオ空挺作戦の陽動的意味も

あつて計画されたものである。その中の一機が、反対方向から出て来た第八戦隊の司偵と滑走路上で衝突し、一瞬にして火に包まれた。司偵は天候偵察のためラシオに先行するものだった。

この突発事故のため、代りの天候偵察機を出したものの、ラシオ附近の天候は出発時刻を過ぎても入電がなかった。止むなく天候状況不明のまま離陸を開始した。滑走路の傍では衝突機の残骸がなおもくすぶっていた。

空中集合を終つたのは〇八四五で、一時間近く遅れていたが、輸送機と物料投下機合わせて約七〇機、それに掩護戦闘機を加え一〇〇機を越す大編隊は、ビルマの天地を圧する偉容だった。

途中の天候は北進するに従い次第に悪く、シャン高原を覆った層雲は厚さを増した。挺進飛行戦隊、第九十八戦隊、襲撃機四機だけが雲下を飛行した。

一〇四二、ラシオ手前約七〇キロ附近で天候はいよいよ険悪となり、進路の前面には密雲閉ざし、豪雨になっていた。先頭を行く新原戦隊長は、やむなく一旦引き返すこととし、その旨トングーの挺進团长に打電して反転した。

第五十六師団はこの日正午頃、ラシオに突入し、空挺作戦はうたかたの如く消えた。

為安井昭一 島津源吉と書かれた日章旗

菅原 道熙

協会のホームページに、米国のユタ大学で教鞭をとっている松林和夫氏から、要旨次の如きメールが入った。

イ、先日偶然知人から元米海軍兵士が所有している日章旗を見せて貰った。口、日章旗は綺麗に保存されていて、為安井昭一 神力□□ 島津源吉と書かれている。

ハ、一九四五年の五月六月頃沖縄海域(北緯28度近辺)で、兵士の乗船の目前で撃墜された飛行士が身に着けていた。

ニ、引き上げられた飛行士の遺骸は、簡単な儀式が施されてシートに巻かれ、金属性の弾薬箱に納められて海中に沈められた。ホ、もし遺族の方と連絡がとれたらと願っている。



安井昭一少尉(大刀洗時代) 岡本久吉氏提供

協会発行の「特別攻撃隊」(平成4年9月23日発行)75頁に、第74振武隊(99襲) 伍長安井昭一 出身京都 少飛15 昭和20・4・7 中城湾で戦死と記載されているので、早速少飛15期生会に連絡をした。

昭和19年3月、大刀洗飛行学校で初期の飛行訓練を、安井生徒と同じ班で受けていた岡本久吉氏によると、約30名いた班員の中で、唯一戦後連絡が取れていないのが安井伍長であった。今回のことを機に、改めて京都市東山区役所、更に府庁援護課に照会したが、プライベートの壁に阻まれてどうにもならず、知覧特攻慰霊顕彰会発行の戦没者名簿遺族欄に、安井つき(姉) 東京都調布市深大寺東町五十一九一六と記載されている場所を訪れたが、何等の手懸りを得ることは出来なかった旨の回答があった。

尚元兵士は日章旗は返還しても良い意向をもっていらっしゃるらしいので、もしそうならば、安井伍長が発進した萬世飛行場跡に建てられた、加世田市平和祈念館に展示することが最も望ましいと考えられ、目下その旨を松林氏に連絡中である。(平成15年3月14日)

収支計算書 (平成14年1月1日から平成14年12月31日まで) (単位:円)

Table with columns: 科目, 予算額, 決算額, 差額, 備考. Rows include income (I) and expenses (II) categories.

注1 合同型襲撃、年次出陣の会員の減少が、少なかつたため。注2 特別攻撃隊の改訂原を頒布出来なかつたため。注3 特別攻撃隊の改訂原200万円計上したが、発行出来なかつたため。

【附】特別攻撃隊襲撃平和祈念協会の平成14年度の計算書について監査した結果適正であることを認めます。

平成15年2月24日 監 査 小松利光

平成14年度事業報告

1. 襲撃事業

- (1) 陸海軍特攻隊改訂合同型襲撃 平成14年1月3日靖国神社に於いて第23回襲撃を挙行政した。襲撃者は宗賀41名、遺族53名、会員242名、併せて336名であった。式典終了後、私学館にて当協会年次総会を開催した。(2) 生田谷観音寺特攻隊年次式典 平成14年9月23日生田谷観音寺において、同寺住僧の第51回年次法要に協賛した。当日は宗賀30名、遺族52名、会員221名、併せて303名が参列した。(3) 全国各地襲撃事業への協賛

2. その他事業

- (1) 機関紙「特攻」50号、51号、52号、53号の各号を発刊し、会員その他に配布した。(2) 「特別攻撃隊」改訂の校正作業を行ない原稿を出版社に提出した。(3) 会員の発行した書籍等の販売PRに協力した。

以上